アントニオス伝

アレクサンドリアのアタナシオス

藤遥　制作

序、1〜4章　生い立ちと修行の始まり

0:1 あなたがたは、エジプトの修道士たちと良い競い合いを始めました。徳を目指す修行で彼らに並ぶか、さらには彼らにまさろうと心に決めたのです。じっさい、あなたがたのところにも今では修道の住まいができ、修道士という名も根づいています。0:2 この志は、だれがほめても当然でしょう。あなたがたの祈りに応えて、神がそれを全うしてくださいますように。さて、あなたがたはわたしにも、幸いなアントニオスの生き方について書いてほしいと求めました。彼はどのように修行を始め、その前はどんな人だったのか。生涯の終わりはどのようなものだったのか。彼について語られていることは本当なのか。あなたがたはそれを知って、自分たちも彼と同じ熱意へと身を向けたいと願っています。わたしは、あなたがたからのこの求めを、心から進んで引き受けました。0:3 わたしにとっても、アントニオスを思い起こすことは、それだけで大きな益になるからです。あなたがたも話を聞けば、この人に感嘆するだけでなく、その志にならいたいと願うにちがいありません。わたしにはそれがわかっています。アントニオスの生涯は、修道士たちにとって、修行の十分な手本だからです。0:4 ですから、彼のことを伝えた人々から聞いた話を、疑ってはいけません。むしろ、その人々から聞いたのはわずかなことにすぎないと考えてください。その人々も、あれだけのことを語るのがやっとだったにちがいないからです。わたしも、あなたがたに促されてこの手紙を書きますが、書き送れるのは、彼のことのうち思い起こしたわずかなことだけです。あなたがたも、ここから船で渡って行く人々に、尋ねつづけてください。0:5 一人ひとりが知っていることを語れば、それでようやく、彼についての話が彼にふさわしいものになるでしょうから。じつは、あなたがたの手紙を受け取ったとき、わたしは修道士たちの何人かを呼び寄せたいと思いました。とりわけ足しげく彼のもとに通っていた人々です。もっと多くを聞いて、より詳しく書き送ろうと思ったのです。しかし、船の出る季節が終わりに近づき、手紙を運ぶ人も急いでいました。そこで、わたし自身が知っていることと、彼から学ぶことのできたことを、敬虔なあなたがたに急いで書くことにしました。わたしは何度も彼に会っていますし、長いあいだ彼につき従い、その手に水を注いだのです[1]。わたしは、どの点でも真実を書くように心を配りました。読む人が実際より多くを聞いて疑ったり、知るべきことより少なく知ってこの人を侮ったりしないためです。

1:1 アントニオスは、生まれはエジプト人でした。両親は家柄がよく、暮らしに足りる財産を持っていました。両親がキリスト者だったので、彼自身もキリスト者として育てられました。幼いころは両親のもとで養われ、両親と家のほかには何も知りませんでした。成長して少年になり、年を重ねていっても、読み書きを習おうとはしませんでした。ほかの子供たちとの付き合いからも離れていたかったのです。彼が心から願ったのは、ヤコブについて書かれているとおり、飾り気のない者として自分の家に住むことでした（創世記二五・二七）。1:2 それでも、両親と一緒に教会堂の集まりには出ていました。子供だからといって怠けることも、年が進んだからといって軽んじることもありませんでした。むしろ両親に従い、朗読に耳を傾けて、そこから受けた益を自分の内に保ちました。1:3 また、ゆとりのある家の子供でしたが、さまざまなぜいたくな食べ物をねだって両親を煩わせることはありませんでした。食べ物の楽しみを求めることもありませんでした。あるものだけで満足し、それ以上は何も求めませんでした。

2:1 両親が亡くなると、彼は、まだごく幼い妹ひとりと共に残されました。年は十八か二十ほどでした。彼は自分で、家と妹の世話をしました。2:2 両親が亡くなって、まだ六か月もたたないころのことです。彼はいつものように教会堂へ向かいながら、心を集めて考えていました。使徒たちは、すべてを捨てて救い主に従いました（マタイ四・二〇）。使徒行伝の人々は、自分の物を売っては、その代金を使徒たちの足もとに持ってきて置き、乏しい人々に分け与えさせました（使徒四・三五）。こうした人々のために天にたくわえられている望みは、どの

ようなもので、どれほど大きいのだろうか。彼は歩きながら、そう思いめぐらしていました。2:3そう思いめぐらしながら教会堂に入ると、ちょうど福音書が朗読されていました。彼は、主が金持ちにこう語っておられるのを聞きました。『もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物をすべて売り払い、貧しい人々に施しなさい。そして、わたしに従ってきなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう』（マタイ一九・二一）。2:4アントニオスは、聖徒たちを思い起こしたのは神から与えられたことだと受けとめました。この朗読も、自分のためになされたのだと思いました。そして、すぐに教会堂を出ると、先祖から受け継いだ土地を村の人々に譲りました。よく実る、たいへん良い畑で、八十ヘクタールほどありました。自分と妹が、もう何事にも煩わされないためでした。2:5ほかに持っていた動かせる物は、すべて売りました。かなりの金を集めると、それを貧しい人々に与えました。妹のためには、わずかだけを残しておきました。

3:1ところが、また教会堂に入ったとき、主が福音書の中で『あすのことを思いわずらうな』と言っておられるのを聞きました（マタイ六・三四）。彼はもうそこにとどまっていられず、外に出て、残しておいた物も、つましく暮らす人々に分け与えました。3:2妹は、よく知っている信仰のあついおとめたちに託し、おとめたちの家で育ててもらうことにしました。それからは、彼自身は家の前で修行に打ち込み、自分に気をつけ、忍耐強く身を律しました。3:3というのも、そのころエジプトには、まだ修道の住まいがこれほど立ち並んではいませんでした。遠い荒野を知る修道士は、一人もいませんでした。自分に気をつけて生きようとする人は、それぞれ自分の村からあまり離れないところで、ひとりで修行していました。3:4さて、そのころ隣の村に、若いときからひとりで暮らす生き方を守って修行してきた老人がいました。アントニオスはこの人を見て、良い熱意をもって見ならいました。そして初めは、彼も村の外れの場所にとどまるようになりました。3:5そこから、どこかに熱心な人がいると聞けば、賢い蜜蜂のように出かけて行って、その人を探しました。その人に会うまでは自分の場所に戻らず、徳への道のための糧のようなものをその人から受け取って、ようやく帰って来ました。3:6こうして初めはそこで過ごしながら、心を定めました。両親の残した物に心を向けず、親族のことも思わず、願いと熱意のすべてを張りつめた修行に注ごうとしたのです。3:7そこで彼は自分の手で働きました。『怠ける者は、食べることもしてはならない』と聞いていたからです（第二テサロニケ三・一〇）。稼いだものは、一部をパンに、一部を乏しい人々のために使いました。また、ひとりで絶えず祈らなければならないと学んでいたので、いつも祈っていました（マタイ六・六、第一テサロニケ五・一七）。3:8じっさい、彼は朗読によく耳を傾けたので、書かれていることを一つも地に落とさず、すべてを心にとどめました。こうして、ついには記憶が書物の代わりになりました。

4:1このように身を律していたので、アントニオスはみなに愛されました。彼のほうは、訪ねて行く熱心な人々に心から従いました。そして、それぞれの人が熱意と修行において自分よりすぐれているところを、学び取りました。ある人には温かな人柄を、ある人には祈りに打ち込む熱心さを見ました。また、ある人には怒らないところを、ある人には人を思いやる心を見て取りました。眠らずにいる人にも、学びを好む人にも目を留めました。忍耐する人にも、断食し地面に寝る人にも感心しました。ある人の柔和を、ある人の寛容をよく見ました。そして、すべての人に共通する、キリストへの敬虔と、互いへの愛を心に刻みました。こうして満たされると、自分の修行の場に帰りました。それからは、一人ひとりから受けたものを自分の内に集め、すべての人の良いところを自分の身に表そうと努めました。じっさい、同じ年ごろの人々と張り合うことはありませんでした。ただ、より良いことにおいて彼らに劣って見えないようにと努めただけです。しかも、そうしながら、だれも悲しませず、かえってその人々も彼のことを喜びました。4:2村の人々も、彼が親しくしていた善を愛する人々も、みな、このような彼を見て、「神に愛された人」と呼びました。ある人々は息子のように、ある人々は兄弟のように、彼を親しく迎えました。

訳注

1 写本によっては『彼につき従い、手に水を注いだ人から学んだ』とある。

5〜7章　悪魔との最初の戦い

5:1 善を憎みねたむ悪魔は、若い者にこれほどの志があるのを見て、我慢がなりませんでした。そこで、いつもしなれていることを、この人に対しても企てました。まず、彼を修行から引きずり下ろそうと試みました。財産のことを思い出させ、妹の世話と、親族とのつながりを思い起こさせました。金銭を好む心、誉れを好む心、さまざまな食べ物の楽しみ、そのほかの暮らしの気楽さを吹き込みました。最後には、徳の道の険しさと、その労苦の大きさを思わせました。からだの弱さと、これから先の歳月の長さもささやきました。5:2 要するに、悪魔は彼の心に、思いの砂ぼこりを大いに巻き上げたのです。正しい決心から彼を引き離そうとしたのでした。ところが敵は、アントニオスの志の前に自分が無力であることを知りました。かえって自分のほうが、彼の堅さに投げ倒され、その大きな信仰にくつがえされ、絶え間ない祈りに倒されていたのです。そこで敵は、『腹のへそにある』自分の武器に頼みました（ヨブ四〇・一六）。これを誇りとして（これが、若い者たちに対する悪魔の最初のわなだからです）、この若者に向かって来ました。夜には彼を騒がせ、昼にもひどく悩ませたので、見ている人々にも二人の格闘がわかるほどでした。5:3 というのも、悪魔が汚れた思いを吹き込むと、アントニオスは祈りによってそれをくつがえしました。悪魔がくすぐると、彼は恥じて顔を赤らめるかのようにして、信仰と祈りと断食とで、からだを城壁のように固めました。あわれな悪魔は、夜、女の姿をとることも、あらゆる仕方で女をまねることもいといませんでした。ただアントニオスを欺くためでした。しかし彼は、キリストを思い、キリストによって与えられた気高さを思いました。魂が知性を備えたものであることを思いめぐらして、悪魔の惑わしの火種を消しました。5:4 敵はまた、快楽のなめらかさを吹き込みました。しかし彼は、怒り悲しむ人のようになって、火のおどしと、うじの苦しみを思いました。これらを快楽に突きつけて、彼は傷を受けずにその誘いを通り抜けました。5:5 こうしたことはすべて、敵の恥となりました。というのも、神のようになれると思った者が、今は一人の若者にもてあそばれたからです。肉と血を見下して誇っていた者が、肉をまとった人間にくつがえされたのです。5:6 主が彼と共に働いておられたからです。わたしたちのために肉をまとわれた主が、からだに、悪魔に対する勝利を与えてくださったのです。ですから、本当に戦う者はだれでも、こう言います。『しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあった神の恵みである』（第一コリント一五・一〇）。

6:1 ついに竜は、このことでもアントニオスを倒すことができませんでした。それどころか、自分が彼の心から押し出されるのを見ました。竜は、書いてあるとおり歯ぎしりをして（使徒七・五四）、我を忘れたかのようになりました。そして、その心のありさまそのままに、黒い子供の姿をとって彼の前に現れました。それから、屈したかのようにして、もう思いによって攻めかかることはしませんでした（この欺く者は追い出されていたからです）。そのかわりに人間の声を使って、こう言いました。「わたしは多くの者を欺き、たいへん多くの者を倒してきた。だが今は、多くの者にしたように、おまえとおまえの労苦にも攻めかかったのに、力が及ばなかった」6:2 アントニオスが「こんなことをわたしに言うおまえは、何者か」と尋ねると、悪霊はすぐに哀れな声を上げました。「わたしは淫行の友だ。淫行へ誘うわなと、そのくすぐりとを、若い者たちに仕掛ける役を引き受けた。淫行の霊と呼ばれている。6:3 節度を守ろうとする者を、どれほど多く欺いたことか！　節制する者を、どれほど多く、くすぐって心変わりさせたことか！　預言者が倒れた者たちをとがめて、『あなたがたは淫行の霊に迷わされた』と言ったのも（ホセア四・一二）、わたしのせいだ。じっさい、あの者たちは、わたしによって足をすくわれたのだ。6:4 わたしこそ、たびたびおまえを悩ませ、そのたびにおまえにくつがえされた者だ」。アントニオスは主に感謝し、悪霊に対して勇気を得て、こう言いました。「それなら、おまえはまったく取るに足りない者だ。じっさい、おまえは心が黒く、子供のように弱い。わた

しはもう、おまえのことを少しも気にかけない。『主がわたしの助け手であり、わたしは敵を見下ろす』のだから（詩篇一一八・七）」 6:5 これを聞くと、あの黒い者は、その言葉におびえて、すぐに逃げ去りました。もうこの人に近づくことさえ恐れたのです。

7:1 これが、悪魔に対するアントニオスの最初の戦いでした。いや、むしろこれも、アントニオスのうちに成った救い主のみわざでした。救い主は『肉においては罪を罰して』くださいました（ローマ八・三）。それは『律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるため』でした（ローマ八・四）。 7:2 しかし、悪霊が屈したからといって、アントニオスが気をゆるめ、自分をおろそかにすることはありませんでした。敵のほうも、負けたからといって、わなを仕掛けるのをやめはしませんでした。じっさい、敵はまた獅子のように歩き回り、彼を攻めるきっかけを探していたのです。 7:3 アントニオスは、敵の策略が多いことを聖書から学んでいたので、ひたすら修行に励みました（エペソ六・一一）。敵は、からだの快楽で心を欺くことはできなかったが、きっと別の策略でわなを仕掛けようとするだろう。悪霊は罪を好むものだから。彼はそう考えたのです。 7:4 そこで彼は、ますますからだを押さえつけて服従させました。ある点で勝っても、別の点で引きずり倒されることのないためでした。それで、もっと厳しい暮らし方に自分を慣らそうと決めました。多くの人が驚きましたが、彼自身はその労苦を楽に負っていました。魂の意欲が長く続いたので、彼のうちに良い習い性ができていたからです。ですから、人からわずかなきっかけを受けただけでも、修行に大きな熱意を表しました。じっさい、彼は眠らずにいることにたいへん励み、一晩じゅう一睡もせずに通すこともしばしばでした。それも一度だけでなく、何度もそうしたので、人々を驚かせました。 7:5 食事は一日に一度、日が沈んでからとりました。二日に一度のこともあり、四日に一度しか食べないこともしばしばでした。食べ物はパンと塩で、飲み物は水だけでした。 7:6 じっさい、肉やぶどう酒のことは、言うまでもありません。ほかの熱心な人々のもとでも、そのようなものは見られなかったのですから。眠るときには、いぐさの敷物一枚で足りるとしました。たいていは、むき出しの地面に横になりました。 7:7 油をからだに塗ることも断りました。若い者は、からだを甘やかすものを求めるより、意欲をもって修行に打ち込むほうがふさわしい、と言っていました。むしろ使徒の言葉を思って、からだを労苦に慣らすべきだと言うのです。『わたしが弱い時にこそ、わたしは強い』という言葉です（第二コリント一二・一〇）。 7:8 というのも、からだの快楽が弱まるときにこそ、魂の張りは強くなると、彼は言っていたからです。彼には、次のような、まことに意外な考えもありました。徳の道も、徳のために世を退くことも、時の長さで量ろうとはせず、願いと決心で量ったのです。 7:9 じっさい、彼は過ぎた時を思い起こすことはしませんでした。毎日、修行を始めたばかりの者のように、前に進むためにいっそう労苦しました。パウロの言葉を、いつも自分に言い聞かせていました。『後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ』という言葉です（ピリピ三・一三）。また、預言者エリヤの言葉も思い起こしていました。『わたしがきょうその前に立っている主は生きておられる』という言葉です（列王紀上一八・一五）。 7:10 というのも、彼はこう見て取っていたからです。エリヤは『きょう』と言うとき、過ぎた時を数えてはいない。いつも新たに始める者として、日ごとに、神の前にあるべき姿で立とうと努めている。それは、心が清く、ほかの何ものでもなく神のみこころに従う備えのできた姿である。 7:11 また彼は、修行者は偉大なエリヤの生き方を鏡として、いつも自分の生き方を見つめなければならない、と心の中で言っていました。

8〜11章　墓と荒野

8:1 こうしてアントニオスは、自分を引き締めて、村から遠く離れたところにある墓へ出かけて行きました。知り合いの一人に、何日もおきにパンを運んで来てくれるように頼みました。そして自分は墓の一つに入り、その人が外から戸を閉めると、ひとりで中にとどまりました。8:2 すると敵は、これに我慢がなりませんでした。それどころか、この人が少しずつ荒野までも修行で満たしてしまうのではないかと恐れました。そこで、ある夜、悪霊の大群を引き連れてやって来て、彼をさんざんに打ちたたきました。彼は責め苦のあまり口もきけなくなり、地面に倒れていました。じっさい、そのときの痛みはあまりにひどかった、と彼は言い切っていました。人に打たれた傷が、あれほどの責め苦をもたらすことは決してありえない、と言うのです。8:3 しかし神の摂理によって（主はご自分に望みを置く者を見過ごしになさらないからです）、次の日、あの知り合いがパンを運んで来ました。戸を開けると、彼が死んだようになって地面に倒れているのが見えました。知り合いは彼をかついで村の教会堂へ運び、床に寝かせました。8:4 親族の多くと村の人々が、死人を見守るようにして、アントニオスのそばに座っていました。真夜中ごろ、アントニオスは我に返り、起き上がりました。見ると、みな眠っていて、あの知り合いだけが目を覚ましていました。彼は合図して、その人をそばに呼び寄せました。そして、だれも起こさずに、もう一度自分をかついで墓へ連れ戻してくれるように頼みました。

9:1 こうして彼は、その人に運ばれて戻りました。いつものように戸が閉められると、彼はまた中でひとりになりました。打たれた傷のために立っていることはできませんでしたが、横になったまま祈りました。9:2 祈り終えると、彼は大声で言いました。「アントニオスはここにいる。おまえたちに打たれても、わたしは逃げはしない。たとえもっと多く打ったとしても、何ものもわたしをキリストの愛から離れさせることはできないからだ（ローマ八・三五）」 9:3 それから、彼は歌いました。『たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、わたしの心は恐れない』（詩篇二七・三）。修行者はこのように思い、このように言っていました。一方、善を憎む敵は、彼が打たれた後でもなお、あえて戻って来たことに驚きました。そこで自分の犬どもを呼び集め、はらわたが煮えくり返る思いで言いました。「見るがいい。淫行の霊によっても、打ちたたいても、こいつを止められなかった。それどころか、こいつはわれわれに向かって大胆になっている。別のやり方でかかろう」 9:4 悪魔にとって、悪のために姿を変えることはたやすいのです。そこで、その夜、悪霊どもは激しい物音を立てたので、あたり一帯が揺れ動くかのようでした。悪霊どもは、その小さな住まいの四方の壁を破ったかのようにして、壁を通って押し入って来るように見えました。獣や這うものの姿に化けていたのです。たちまち、そこは獅子、熊、豹、雄牛、蛇、まむし、さそり、狼のまぼろしで満ちました。9:5 そのどれもが、それぞれの姿のとおりに動きました。獅子は襲いかかろうとしてほえたけり、雄牛は角で突きかかるかに見えました。蛇は這い寄って来ても届かず、狼は飛びかかろうとして押しとどめられました。要するに、現れたものすべてがいっせいに立てる物音はすさまじく、その怒りは荒々しかったのです。9:6 アントニオスは、それらにむち打たれ、刺されて、からだにいっそうひどい痛みを覚えました。しかし、じっと横になったまま、魂ではいっそう目覚めていました。からだの痛みのためにうめきはしましたが、心は冷静に保ち、あざけるようにして言いました。「おまえたちに少しでも力があるなら、一匹だけでも来れば足りたはずだ。だが主がおまえたちを骨抜きになさったので、数を頼んで、何とかわたしをおびえさせようとしているのだ。おまえたちが理性のない獣の姿をまねること自体が、おまえたちの弱さのしるしだ」 9:7 そして勇気を得て、また言いました。「もしできるのなら、またわたしに対する権威を受けたのなら、ぐずぐずせずにかかって来るがいい。だが、できないのなら、なぜむだに騒ぎ立てるのか。じっさい、わたしたちの主への信仰が、わたしたちにとって印であり、守りの城壁なのだ」 9:8 悪霊どもは、いろい

ろと試みた末に、彼に向かって歯ぎしりしました。もてあそばれているのは彼ではなく、むしろ自分たちのほうだったからです。

10:1 しかし主は、このときもアントニオスの戦いを忘れてはおられず、彼を助けに来てくださいました。彼が目を上げると、屋根が開かれるかのようになり、一筋の光が自分のほうへ降りて来るのが見えました。10:2 すると悪霊どもはたちまち姿を消し、からだの痛みもすぐにやみました。住まいも、もとのとおりに損なわれずにありました。アントニオスは助けを感じ取り、ほっと息をついて、痛みも軽くなりました。そして、現れた幻に願って言いました。「どこにおられたのですか。なぜ初めから現れて、わたしの痛みを止めてくださらなかったのですか」。すると、彼に声がありました。「アントニオスよ、わたしはここにいた。だが、あなたの戦いぶりを見届けようと待っていたのだ。10:3 あなたは耐え忍び、負けなかった。だから、わたしはいつもあなたの助け手となり、あなたの名をいたるところで知られるようにしよう」。これを聞くと、彼は起き上がって祈りました。すると、からだに前よりも大きな力が備わったと感じるほど、強くなりました。そのころ、彼はもう三十五歳に近づいていました。

11:1 次の日、彼は出て行きました。神を敬う道に、いっそう意欲を燃やしていたのです。そして、以前の、あの老人のところへ行き、荒野で共に暮らしてほしいと頼みました。11:2 しかし老人は、年をとっていることと、まだそのような習わしがないことを理由に断りました。そこで彼は、すぐに自分ひとりで山へ向かいました。ところが敵は、またしても彼の熱意を見て、これを妨げようとしました。そして、道に大きな銀の皿のまぼろしを置きました。11:3 アントニオスは、善を憎む者のたくらみを見抜いて立ち止まりました。皿を見つめ、その中にいる悪魔をとがめて言いました。「荒野に、どうして皿があるのか。この道は人の踏みならした道ではない。ここを旅した者の足跡もない。こんなに大きな物が落ちたのなら、気づかれないはずがない。11:4 それに、なくした者は、引き返して探せば見つけたはずだ。ここは荒野なのだから。これは悪魔のたくらみだ。悪魔よ、こんなことで、わたしの意欲を妨げることはできない。11:5 じっさい、こんなものは『おまえもろとも、うせてしまえ』（使徒八・二〇）」。アントニオスがこう言うと、それは火の前の煙のように消え去りました。

12〜15章　廃れた砦

12:1 その後、彼は道を進んで行くと、今度はまぼろしではなく、本物の金が道に投げ出されているのを見ました。それを見せたのは敵だったのでしょうか。それとも、もっとすぐれた力がこの闘士を鍛え、彼がほんとうの財産さえ気にかけないことを悪魔に示したのでしょうか。それは彼自身も語らず、わたしたちも知りません。ただ、そこに見えたのが金だったことだけは確かです。12:2 アントニオスは、その量の多さには驚きました。しかし、火をまたぎ越えるようにして、振り返りもせずにそのそばを通り過ぎました。それどころか、その場所が隠れて見えなくなるほど、走って先を急ぎました。12:3 こうして彼は、志をいっそう強めて、山へ向かいました。そして川の向こう岸に、打ち捨てられた砦を見つけました。長い年月のために、そこは這うものでいっぱいでした。彼はそこに移り、住みつきました。12:4 這うものたちは、だれかに追い立てられたかのように、すぐに退いて行きました。彼は入口をふさぎ、六か月分のパンを蓄えました（テーベ地方の人々はこうするのです。パンは一年じゅう傷まずにもつことも、よくあります）。中には水もありました。彼は神殿の奥の聖所に身を沈めるようにして、ひとり中にとどまりました。自分は外に出ず、訪ねて来る者のだれにも会いませんでした。12:5 こうして彼は、長いあいだこのように修行を続けました。パンは年に二度だけ、上から、屋根越しに受け取りました。

13:1 訪ねて来た知り合いたちは、彼が中に入れてくれないので、しばしば何日も何夜も外で過ごしました。すると中から、群衆が騒ぎ立て、物を打ち鳴らし、哀れな声を上げて叫んでいるような音が聞こえました。「われわれの所から出て行け。荒野がおまえに何のかかわりがあるのか。おまえには、われわれの襲撃は耐えられまい」13:2 外にいた人々は、はじめは、何人かの人間が彼と戦っていて、はしごを使って彼のところへ入り込んだのだと思っていました。しかし、すき間からのぞいてみても、だれも見えませんでした。そこで、これは悪霊だと考え、自分たちも恐ろしくなって、アントニオスを呼びました。13:3 彼は悪霊どもを気にかけるよりも、この人々の声に耳を傾けました。そして戸の近くまで来て、人々に、帰るように、また恐れないようにと勧めました。というのも、彼の言うには、悪霊どもは、おじける者に向かってこのようなまぼろしを作り出すからです。13:4 「だから、あなたがたは自分に印をして、安心して帰りなさい。こいつらには、勝手にふざけさせておけばよい」。人々は、十字架のしるしで守りを固めて帰って行きました。彼はとどまりましたが、悪霊どもから何の害も受けませんでした。戦い続けても、疲れることさえありませんでした。というのも、上から見せられる幻が次々に加わり、敵は弱かったからです。それで苦労から大いに休みを得て、いっそうの意欲へと整えられました。13:5 じっさい、知り合いたちは、彼が死んでいるだろうと思って、たびたび訪ねて来ました。すると、彼がこう歌っているのが聞こえました。『神が立ち上がられ、その敵が散らされるように。神を憎む者が、御前から逃げ去るように。13:6 煙が消え去るように、彼らも消え去るように。ろうが火の前に溶けるように、罪人は神の前に滅びるように』（詩篇六八・一〜二）。またこうも歌っていました。『もろもろの国民はわたしを囲んだ。わたしは主のみ名によって彼らを退けた』（詩篇一一八・一〇）。

14:1 こうして彼は、二十年近く、このようにひとりで修行を続けました。外に出ることもなく、人にたびたび姿を見られることもありませんでした。その後、多くの人が、彼の修行にならいたいと切に望むようになりました。ほかの知り合いたちもやって来て、戸を力ずくで打ち倒し、押し破りました。するとアントニオスが出て来ました。神殿の奥の聖所から、奥義に導き入れられ、神に満たされて出て来る人のようでした。このとき初めて、彼は砦から出て、訪ねて来た人々に姿を見せたのです。14:2 人々は彼を見て驚きました。そのからだが、前と同じ様子を保っていたからです。運動をしない者のように太ってもおらず、断食や悪霊との戦いのためにやせ細ってもいませんでした。じっさい、世を退く前に人々が知っていたとおりの姿だったのです。魂のたたずまいも、また清らかでした。

悲しみに縮こまることも、快楽にゆるむことも、笑いや沈んだ気分にとらわれることもなかったからです。じっさい、群衆を見ても心を乱されず、これほど大勢に抱きしめられても浮き立ちませんでした。かえって、彼はどこまでも平らかでした。理性に導かれる者として、本性にかなったあり方にしっかりと立っていたのです。14:3 じっさい、主は彼を通して、そこに居合わせた人のうち、からだを病む多くの人をおいやしになりました。またほかの人々を、悪霊からお清めになりました。主はまた、アントニオスに語る恵みをお与えになりました。それで彼は、悲しむ多くの人を慰め、争う人々を和解させて友としました。そして、だれにでも、世にあるものの何一つとしてキリストへの愛よりも重んじてはならない、と言い聞かせました。14:4 彼は人々と語り合い、来たるべき良いものと、わたしたちに示された神の人間への愛とを思い起こすように勧めました。神は『ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された』（ローマ八・三二）かたなのです。そして多くの人を説き伏せて、ひとりで暮らす生き方を選ばせました。こうして、ついに山々にも修道の住まいができ、荒野は修道士たちによって町になりました。彼らは自分のものを後にして出て来て、天にある国籍に名を連ねたのです。

15:1 あるとき、彼はアルシノエ州の運河を渡らなければならなくなりました（兄弟たちを訪ねるためでした）。運河には、わにがいっぱいいました。彼はただ祈っただけで、一緒にいた人たちみなと共に水に入り、無事に渡りきりました。15:2 修道の住まいに戻ると、彼は前と同じ、厳かで力強い労苦を続けました。そしてたえず語り続け、すでに修道士となった人々の意欲を増し加え、ほかの人々の多くを修行への愛に動かしました。こうして、彼のことばが人々を引き寄せたので、またたく間に修道の住まいが数多くでき、彼はそのすべてを父として導いたのです。

16〜20章　講話の始まり

16:1 ある日、彼が出て来ると、修道士たちがみな彼のもとにやって来て、話を聞かせてほしいと願いました。そこで彼は、エジプトの言葉で、次のように語りました。聖書は、教えるのに十分なものだ。しかし、信仰において互いに励まし合い、ことばで互いを奮い立たせるのは、よいことだ。16:2 だから、あなたがたも、子供たちとして、知っていることを父に話して聞かせなさい。わたしもまた、あなたがたより年長の者として、知っていること、自分で経験してきたことを分け与えよう。何よりもまず、すべての人が、次のことを共通の熱意としよう。始めたからには、くじけないことだ。労苦のうちにうみ疲れず、「わたしたちはもう長いあいだ修行してきた」と言わないことだ。むしろ、毎日はじめる者のように、意欲をいっそう増し加えていこう。16:3 じっさい、人の生涯は、その全体でも、来たるべき世々と比べて量れば、きわめて短い。だから、わたしたちの時のすべても、永遠のいのちに比べれば無に等しいのだ。16:4 世にあるものは、どれも、それに見合う値で売られる。人は等しいものを等しいものと引き換える。しかし、永遠のいのちの約束は、わずかなもので買い取られる。じっさい、こう書いてある。『わたしたちのいのちの日々は七十年、健やかであっても八十年。それを超える分は、労苦と苦しみである』（詩篇九〇・一〇）。16:5 だから、たとえまる八十年、あるいは百年、修行のうちにとどまり続けたとしよう。それでも、わたしたちが王として治めるのは、その百年と等しい年月ではない。百年の代わりに、世々限りなく治めるのだ。わたしたちは地上で戦っても、地で受け継ぐのではない。約束は天にあるのだ。また、からだを朽ちるものとして脱ぎ、朽ちないものとして取り戻すのだ。

17:1 だから、子供たちよ、うみ疲れないようにしよう。長いあいだ修行してきたとか、何か大きなことをしているとか、思わないようにしよう。じっさい、『今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない』（ローマ八・一八）のだ。17:2 また、世を見て、何か大きなものを捨てたのだと思わないようにしよう。じっさい、この地全体でさえ、天全体に比べれば、ごく小さいのだ。だから、たとえわたしたちが全地の主人で、その全地を捨てたとしても、天の御国に比べれば何の値打ちもなかっただろう。17:3 じっさい、それは、ある人が銅貨のドラクマ一枚を惜しまず、金貨のドラクマ百枚をもうけるようなものだ。全地の主人である人も、それを捨てるなら、わずかなものを手放して、百倍を受けるのだ。17:4 全地でさえ天に値しないのなら、わずかな畑を手放した人は、何も後に残してこなかったも同然だ。たとえ家や多くの金を手放したとしても、誇ったり、気落ちしたりしてはならない。17:5 そのうえ、こう考えるべきだ。たとえ徳のために手放さなくても、わたしたちはやがて死ぬとき、それを残していく。しかも、伝道者が語っているとおり、しばしば望まない人々にまで残すのだ（伝道の書二・一八〜二一）。それなら、どうしてわたしたちは、徳のために後に残し、御国をも受け継ごうとしないのだろうか。だから、わたしたちのだれも、持ち物を得たいという欲を起こしてはならない。17:6 じっさい、自分と一緒に持って行きもしないものを得て、何の得になるだろうか。むしろ、一緒に持って行けるものを、どうして得ようとしないのだろうか。それは、思慮、正義、節制、勇気、悟り、愛、貧しい人々への愛、キリストへの信仰、怒らないこと、旅人をもてなすことだ。これらを得るなら、わたしたちは、それらが先にあちらにいるのを見いだすだろう。それらは柔和な人たちの地で、わたしたちのために宿を整えているのだ。

18:1 だから、こうしたことからも、だれもが、おろそかにしないよう自分を説き伏せなさい。とりわけ、自分は主の僕であり、主人である主に仕えなければならない者だと考えるなら、なおさらだ。僕は、「きのう働いたから、きょうは働かない」とは、あえて言わないだろう。過ぎた時を数えて、それから先の日々に働くのをやめることもない。むしろ、福音書に書いてあるとおり、毎日同じ意欲を示す。自分の主人に喜ばれ、危うい目にあわないためだ。そのように、わたし

たちも、毎日修行にとどまり続けよう。わたしたちは知っている。もし一日でも怠るなら、主は過ぎた時のゆえにわたしたちをお許しにはならず、その怠りのゆえに、わたしたちにお怒りになるのだ。18:2 エゼキエルの書でも、わたしたちはそのように聞いた（エゼキエル一八章）。ユダもまた、ただ一夜のために、それまでの時の労苦を失ったのだ。

19:1 だから、子供たちよ、修行をしっかりと保ち、気落ちしないようにしよう。じっさい、このことでは、主もわたしたちと共に働いてくださる。書いてあるとおり、神は、善を選び取る人すべてと共に働いて、善に至らせてくださるのだ（ローマ八・二八）。19:2 おろそかにしないためには、使徒のことば、『わたしは日々死んでいる』（第一コリント一五・三一）を思い巡らすのがよい。じっさい、わたしたちも、日々死ぬ者として、そのように生きるなら、罪を犯すことはないだろう。19:3 このことばの意味は、こうだ。毎日起きるときには、夕方まで生きながらえることはないと考える。また眠りにつこうとするときには、もう起きることはないと考える。わたしたちのいのちは、本来、先の知れないものであり、摂理によって日ごとに量られているからだ。19:4 このような心構えで、毎日そのように生きるなら、わたしたちは罪を犯さないだろう。何かを欲しがることも、だれかに恨みを抱くことも、地上に宝をたくわえることもないだろう。かえって、毎日死を待ち受ける者として、何も持たない者となり、すべての人に、すべてを許すだろう。女への欲望にも、ほかの汚れた快楽にも、決してしがみつかないだろう。むしろ、それを過ぎ去っていくものとして、それに背を向けるだろう。わたしたちはいつもおののき、さばきの日を前もって見つめているからだ。19:5 じっさい、より大きな恐れと、責め苦へのおののきは、いつも快楽の甘さを消し去り、傾きかけた魂を立ち直らせるのだ。

20:1 だから、わたしたちは始めたのであり、すでに徳の道に足を踏み入れたのだ。前にあるものに達するために、いっそうからだを伸ばしていこう（ピリピ三・一三）。だれも、ロトの妻のように、うしろへ振り向いてはならない（創世記一九・二六）。とりわけ、主がこうお語りになったのだから。『手をすきにかけてから、うしろへ振り向く者は、だれも天の御国にふさわしくない』（ルカ九・六二）。20:2 振り向くとは、悔やんで、ふたたび世のことを思うことにほかならない。徳について聞いても、恐れてはならない。その名に驚いてもいけない。じっさい、徳はわたしたちから遠くにあるのでも、わたしたちの外に成り立つのでもない。そのわざはわたしたちの内にあり、わたしたちが望みさえすれば、たやすいことなのだ。20:3 ギリシヤ人たちは、学問を学ぶために、国を離れて旅をし、海を渡る。しかし、わたしたちは、天の御国のために国を離れる必要はなく、徳のために海を渡る必要もない。20:4 じっさい、主は前もってこうお語りになった。『天の御国は、あなたがたの内にある』（ルカ一七・二一）。だから、徳が必要とするのは、わたしたちが望むことだけだ。徳はわたしたちの内にあり、わたしたちから成り立つのだから。20:5 じっさい、魂が知性を本性にかなったあり方に保っているとき、徳は成り立つ。魂が本性にかなったあり方を保つのは、造られたとおりにとどまっているときだ。魂は、きわめて良く、まっすぐなものとして造られたのだ。20:6 だからこそ、ヌンの子ヨシュアは民に命じて、『あなたがたの心を、イスラエルの神、主に向けてまっすぐにせよ』（ヨシュア二四・二三）と言った。またヨハネは、『あなたがたの道筋をまっすぐにせよ』（マタイ三・三）と言った。20:7 じっさい、魂がまっすぐであるとは、魂の知性が、造られたとおりに、本性にかなったあり方をしていることだ。反対に、魂がそれて、本性にかなったあり方からねじ曲がるとき、それは魂の悪徳と呼ばれる。20:8 だから、これはむずかしいことではない。じっさい、造られたとおりにとどまるなら、わたしたちは徳のうちにある。しかし、悪いことを思い巡らすなら、悪い者とみなされる。もしこれを外から手に入れなければならないのなら、ほんとうにむずかしかっただろう。しかし、これはわたしたちの内にあるのだから、汚れた思いから自分を守ろう。そして、魂を預かりものとして受けたのだから、主のために保とう。主がご自分の作品を、お造りになったときのままのものとして、お認めになるためだ。

21〜24章　悪霊の策略

21:1 怒りに暴君のように支配されず、欲に治められないこと。それをわたしたちの努めとしよう。じっさい、こう書いてある。『人の怒りは、神の義を全うするものではない。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す』（ヤコブ一・二〇、一五）。21:2 このように生きながら、しっかりと身を慎もう。書いてあるとおり、油断することなく自分の心を守ろう（箴言四・二三）。じっさい、わたしたちには恐ろしく悪賢い敵がいる。よこしまな悪霊たちだ。使徒が言っているとおり、わたしたちの戦いは、これらに対するものなのだ。それは『血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、このやみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する』戦いだ（エペソ六・一二）。21:3 さて、彼らの群れは、わたしたちの周りの空中に大勢いて、わたしたちから遠くにはいない。しかも、彼らのあいだには大きな違いがある。21:4 彼らの本性とその違いについては、語ることが多いだろう。そうした話は、わたしたちよりすぐれた人々のするものだ。今わたしたちに差し迫って必要なのは、わたしたちに向けられた彼らの悪だくみを知ることだけだ。

22:1 そこで、まずこのことを知っておこう。悪霊は、悪霊と呼ばれるようなものとして造られたのではない。神は、何一つ悪いものをお造りにならなかったからだ。彼らもまた良いものとして造られた。しかし天上の思慮から落ち、それからは地の周りをさまよっている。ギリシャ人たちのことは、まぼろしで欺いた。しかし、わたしたちキリスト者のことはねたんで、あらゆる手を尽くしている。わたしたちが天へ上るのを妨げようとしているのだ。自分たちが落ちたところへ、わたしたちが上って行かないためだ。22:2 だから、多くの祈りと修行が必要だ。それは、霊によって霊を見分ける賜物を受け、彼らのことを知ることができるようになるためだ。だれがまだ悪さの少ない者で、だれがそれより悪い者か。それぞれがどんなことに熱心で、それぞれがどうしたらくつがえされ、追い出されるのか。それを知るためだ。22:3 じっさい、彼らの悪だくみは多く、はかりごとの手口も多い。幸いな使徒とその仲間たちは、そうしたことを知っていて、こう言った。『わたしたちは、彼の策略を知らないわけではない』（第二コリント二・一一）。わたしたちもまた、彼らから試みを受けて知ったことによって、彼らのことで互いを正さなければならない。わたしは、彼らを少しは経験してきたので、子供たちに語るように話そう。

23:1 彼らは、すべてのキリスト者、とりわけ修道士たちが、労苦をいとわず進歩しているのを見ると、まず手を出して試みる。道のかたわらにつまずきを置くのだ。彼らの置くつまずきとは、悪い思いのことだ。23:2 しかし、わたしたちは彼らの吹き込むものを恐れる必要はない。祈りと断食と、主への信仰によって、彼らはたちまち倒れるからだ。だが、倒れてもやめはしない。悪賢く、ずるがしこく、またしても近づいて来る。23:3 じっさい、あからさまに、汚れた快楽によって心を欺くことができないと、別のしかたでまた襲いかかる。それからは、まぼろしをこしらえて、おびえさせようとする。姿を変えて、女や、獣や、這うものや、巨大なからだや、兵士の大軍をまねるのだ。23:4 しかし、そうであっても、彼らのまぼろしにおじけてはならない。じっさい、それは何ものでもなく、すぐに消えてしまう。とりわけ、信仰と十字架のしるしで身を固めているならそうだ。23:5 だが、彼らは大胆で、まったく恥知らずだ。じっさい、こうして負けても、また別のしかたで襲いかかる。予言し、何日か先に起こることを告げるふりをする。また、屋根に届くほど背が高く、横にも大きい姿を見せる。思いによって欺けなかった人々を、こうしたまぼろしによってでも、かすめ取ろうとするのだ。23:6 しかし、こうしても、魂が信仰と心の望みとで守り固められているのを見ると、とうとう自分たちのかしらを連れて来る。

24:1 アントニオスはよく、悪霊たちがこのような姿で現れると言っていました。主がヨブに悪魔を示して、こうお語りになったときの姿です。『その目は明けの明星の姿のようだ。その口からは燃えるたいまつが出て、火花が飛び散る。

その鼻の穴からは、炭火で燃える炉の煙が出る』（ヨブ四一・一八～二〇）。24:2『その魂は炭火、その口からは炎が出る』（ヨブ四一・二一）。このような姿で現れる悪霊たちのかしら、この悪賢い者は、先に言ったとおり、大きなことを語って人をおびえさせる。主がふたたびその正体をお暴きになったとおりだ。ヨブにはこうお語りになった。『これは鉄をわらのように、青銅を朽ち木のようにみなす。海を香油のつぼのように、淵の奥底を捕虜のようにみなす。淵を散歩道のように思った』（ヨブ四一・二七、三一～三二）。また預言者を通しては、こうお語りになった。『敵は言った。わたしは追い行き、追い着こう』（出エジプト一五・九）。さらに別の預言者を通しては、こうお語りになった。『わたしは全世界を、巣を取るようにこの手でつかみ、捨てられた卵のように取り上げよう』（イザヤ一〇・一四）。24:3総じて彼らは、このような大言を吐こうとし、こうしたことを約束する。神を敬う人々を欺くためだ。しかし、信じる者であるわたしたちは、そうであっても、悪魔のまぼろしを恐れてはならない。その声に耳を傾けてもならない。24:4じっさい、彼は偽りを言い、真実なことは何一つ語らない。現に、これほどのことを語って思い上がっていたのに、竜のように救い主のつり針で引き上げられた。家畜のように鼻に端綱をかけられ、逃亡奴隷のように鼻に輪をはめられ、唇を輪で貫かれた（ヨブ四一・一～二）。24:5また、主によってずめのように縛られ、わたしたちのなぶりものとされている（ヨブ四一・五）。悪魔も、彼と共にいる悪霊たちも、さそりや蛇のように、わたしたちキリスト者に踏みつけられる者とされているのだ（ルカ一〇・一九）。24:6その証拠に、今わたしたちは、悪魔に逆らって生きている。じっさい、海を消し去り、世界をつかむと約束した者が、見なさい、今はあなたがたの修行を阻むこともできない。それどころか、悪魔に逆らって語っているわたしを阻むことさえできないのだ。24:7だから、彼が何を語ろうと、耳を傾けないようにしよう。偽りを言っているのだから。彼のまぼろしにもおじけないようにしよう。それもまた偽りなのだ。じっさい、まぼろしの中に見える光は、まことの光ではない。むしろ、彼らは自分たちのために用意されている火の、前触れと似姿を帯びているのだ。そして、やがて自分たちが焼かれるその火で、人々をおびえさせようとする。24:8現に、彼らは現れても、またすぐに消えてしまう。信じる者のだれをも傷つけることなく、やがて自分たちを迎える火の似姿を身に帯びているだけだ。だから、このようにしても、彼らを恐れるにはおよばない。キリストの恵みによって、彼らのたくらみは、みな無に帰するからだ。

25〜28章　悪霊の無力

25:1 彼らは欺く者で、どんなものにも変わり、姿を変える用意ができている。現に、彼らは姿を見せないまま、歌いながら詩篇を唱えるふりをすることがよくある。聖書の言葉を口にすることもある。わたしたちが朗読していると、こだまのように、朗読されたのと同じ言葉をすぐに何度も繰り返すこともある。眠っているわたしたちを、祈りのために起こしもする。しかも、それを絶えずするので、わたしたちをほとんど眠らせないほどだ。25:2 また、自分たちを修道士の姿に似せて、敬虔な者のふりをして語ることもある。似た姿で惑わし、欺かれた人々を、思うところへ引いて行くためだ。25:3 しかし、彼らに耳を傾けてはならない。たとえ祈りのために起こしても、まったく食べるなと勧めても、耳を傾けてはならない。わたしたちについて知っていることを持ち出して、責めとがめるふりをしても、同じだ。じっさい、彼らがそうするのは、敬虔のためでも真実のためでもない。純真な人々を絶望に追い込み、修行は役に立たないと言うためだ。ひとりで暮らす生き方は重荷で、ひどくつらいものだと思わせて、人々にいや気を起こさせるためだ。彼らに逆らって生きる人々を妨げるためなのだ。

26:1 だから、主から遣わされた預言者は、このような者たちを嘆いて言った。『わざわいなるかな、その隣り人に濁ったくつがえしを飲ませる者よ』（ハバクク二・一五）。じっさい、このようなたくらみや考えは、徳へ導く道をくつがえすものなのだ。26:2 主ご自身も、悪霊たちが真実を語っていたのに、それでも彼らの口をおふさぎになり、語るのをお阻みになった。じっさい、彼らは『あなたこそ神の子です』（ルカ四・四一）と、真実を言っていたのだ。主がそうなさったのは、彼らが真実といっしょに、自分たちの悪までまき散らさないためだ。また、たとえ真実を語っているように見えても、このような者たちには決して耳を傾けないよう、わたしたちを習わせるためだ。じっさい、わたしたちは聖書を持ち、救い主から自由を与えられている。それなのに悪魔から教えられるのはふさわしくない。悪魔は自分の分を守らず、本来の思いを捨てて、別の思いをいだいた者なのだ。26:3 だから、悪魔が聖書の言葉を語っても、主はそれを阻んで言っておられる。『しかし神は罪人に言われる。あなたはなんの権利があってわたしの定めを述べ、わたしの契約を口にするのか』（詩篇五〇・一六）。じっさい、彼らは何でもする。語り、騒ぎ立て、演じ、かき乱して、純真な人々を欺こうとするのだ。26:4 現に、物音を立て、愚かに笑い、口笛を吹く。だが、だれも耳を傾けないと、とうとう負けた者のように泣き、嘆き悲しむ。

27:1 主は神として、悪霊たちの口をおふさぎになった。しかし、わたしたちは聖徒たちから学んだのだから、彼らにならって行い、その勇気にならうのがふさわしい。じっさい、聖徒たちも、このようなことを見て言った。『罪人がわたしの前に立ったとき、わたしは口がきけなくなり、へりくだらされ、良いことについても黙した』（詩篇三九・一〜二）。また言った。『しかしわたしは耳の聞こえない者のように聞かず、口のきけない者のように口を開きません。27:2 わたしは聞かない人のようになりました』（詩篇三八・一三〜一四）。だから、わたしたちも、彼らの言うことを聞かないようにしよう。彼らはわたしたちにとってよその者だからだ。たとえ彼らが祈りのために起こそうと、断食について語ろうと、従わないようにしよう。むしろ、自分たちの修行の志に心を向けよう。何事も欺きをもって行う彼らに、欺かれないようにしよう。27:3 また、たとえ彼らが襲いかかって来るように見えても、死をもっておどしても、恐れることはない。じっさい、彼らは弱く、おどすことしかできないのだ。

28:1 このことについては、すでに話のついでに触れた。しかし今は、彼らについて、さらにくわしく話すのをためらうまい。じっさい、こうして思い起こすことは、あなたがたを守ることになるだろう。主が来られたので、敵は倒れ、その力は弱くなった。28:2 だから、敵は何もできないのに、それでも暴君のように、倒れてもおとなしくしていない。せめて言葉だけでもおどすのだ。あなたがたは、ひとりひとりこのことを考えなさい。そうすれば、悪霊を侮ることができ

る。28:3 もし彼らが、わたしたちと同じようなからだに縛られていたのなら、こう言えたかもしれない。「人間が隠れていれば見つけられないが、見つければ害を加える」。わたしたちもまた、隠れて戸を閉ざし、彼らに気づかれずにいることができただろう。28:4 しかし、彼らはそうではない。戸が閉ざされていても入ることができる。彼らも、その第一の者である悪魔も、空中のいたるところにいる。しかも悪意に満ち、害を加える用意ができている。救い主がお語りになったように、悪の父である悪魔は、初めから人殺しなのだ（ヨハネ八・四四）。それなのに、わたしたちは今も生きていて、なおさら悪魔に逆らって生きている。だから、彼らに何の力もないことは明らかだ。28:5 じっさい、場所が彼らのはかりごとを阻むのではない。わたしたちを自分たちの友と見て、容赦しているのでもない。善を愛していて、改めるのでもない。むしろ、彼らは悪い者たちだ。徳を愛し神を敬う人々を害することほど、彼らが熱心に求めることはないのだ。28:6 彼らは何もできないので、何もしない。ただおどすだけだ。じっさい、できたのなら、ためらわずにすぐ悪を行っただろう。そのための決心はできているのだから。とりわけ、わたしたちに対してはそうしただろう。28:7 現に、見なさい、わたしたちは今こうして集まり、彼らに逆らって語っている。彼らも、わたしたちが進歩すれば自分たちが弱くなることを知っている。だから、もし彼らに力があったなら、わたしたちキリスト者を一人も生かしておかなかっただろう。罪人にとって、神を敬うことは忌むべきものだからだ（シラ書一・二五）。28:8 しかし、彼らは何もできないので、かえって自分自身を傷つけている。おどしていることを何一つ行えないからだ。さらに、彼らを恐れないために、次のことも考えておかなければならない。もし彼らに力があったなら、群れをなして来ることも、まぼろしを見せることも、姿を変えて策略をめぐらすこともなかっただろう。ただ一人が来て、できること、したいことをすれば足りたはずだ。とりわけ、力を持つ者はだれでも、まぼろしで人を殺したり、群れでおびえさせたりはしない。すぐに思いのままに、その力を振るうものだからだ。28:9 しかし、悪霊たちは何もできないので、舞台の上でのように戯れている。姿を変え、群れのまぼろしや、さまざまに装う姿で子供たちをおびえさせる。だからこそ、なおさら弱い者として侮られるべきなのだ。28:10 現に、真の天使が主から遣わされて、アッスリヤ人に向かったときのことだ。その天使は、群れも、外からのまぼろしも、物音も、手を打ち鳴らす音も必要としなかった。静かにその力を用いて、たちまち十八万五千人を殺した（列王紀下一九・三五）。28:11 しかし、このような、何もできない悪霊たちは、せめてまぼろしでおびえさせようとするのだ。

29〜34章　悪霊の予告に心を向けない

29:1 もしだれかがヨブのことを考えて、こう言うとしよう。「それなら、なぜ悪魔は出て行って、ヨブにあらゆることをしたのか。持ち物を奪って裸にし、子供たちを殺し、ヨブ自身をいやな腫物で打ったではないか」。そのような人は、逆にこう知りなさい。力を持っていたのは悪魔ではない。試みのためにヨブを悪魔にお渡しになった神なのだ（ヨブ一〜二章）。現に、悪魔は何もできなかったので、願い求め、許しを受けてから行ったのだ。29:2 だから、このことからも、敵はなおさら見下げられて当然の者だ。望んでいたのに、正しい人ひとりにさえ力が及ばなかったからだ。じっさい、力があったなら、願いはしなかっただろう。しかも、一度ならず二度まで願ったのだから、弱く、何もできない者であることは明らかだ。29:3 悪魔がヨブに力を振るえなかったのも、不思議ではない。神がお許しにならなければ、ヨブの家畜にさえ滅びは起こらなかったのだから。それどころか、悪魔は豚に対してさえ力を持っていない。じっさい、福音書に書かれているとおり、悪霊たちは主に願って言った。『豚の中に行くことを許してください』（マタイ八・三一）。29:4 豚に対してさえ力を持たないのなら、まして、神のかたちに造られた人間に対して、力を持っているはずがない。

30:1 だから、恐れなければならないのは神だけだ。悪霊たちは侮り、少しも怖がってはならない。それどころか、彼らがこうしたことをすればするほど、わたしたちは彼らに逆らう修行に、いっそう励もう。30:2 じっさい、正しい生き方と神への信仰は、彼らに対する大きな武器だ。現に、彼らは修行者の断食、眠らずにいること、祈りを恐れている。柔和、静けさ、金銭を愛さないこと、むなしい誉れを求めないこと、謙遜も恐れる。貧しい人々への愛、施し、怒らないこと、そして何よりも、キリストへの敬虔を恐れるのだ。30:3 じっさい、彼らが何でもするのは、自分たちを踏みつける者が出ないようにするためだ。彼らは、救い主が信じる者たちに、自分たちに逆らう恵みを与えてくださったことを知っているからだ。救い主はこうお語りになった。『見よ、わたしはあなたがたに、へびやさそりを、また敵のあらゆる力を踏みつける権威を授けた』（ルカ一〇・一九）。

31:1 だから、彼らが前もって告げるふりをしても、だれも相手にしてはならない。じっさい、彼らは何日か後に訪ねて来る兄弟たちのことを、何日も前に告げることがよくある。そして、その兄弟たちは本当にやって来る。しかし、彼らがそうするのは、聞く人々を思いやってのことではない。自分たちを信じるように人々を説き伏せ、手中に収めてから、滅ぼすためだ。だから、彼らに耳を傾けてはならない。それどころか、彼らが語っても、その言葉をくつがえさなければならない。わたしたちには彼らなど要らないからだ。31:2 じっさい、彼らは人間よりも細やかな体を持っている。歩き始めた人々を見て、走って先回りし、知らせたとしても、何の不思議があるだろうか。馬に乗った人でも、徒歩の人より先に着いて、同じように前もって告げることができる。だから、このことでも彼らに感心してはならない。31:3 じっさい、彼らはまだ起こっていないことを何一つ前もって知ってはいない。すべてのことを、それが起こる前から知っておられるのは、神だけだ（スザンナ四二）。彼らは、見たことを、盗人のように先に走って知らせるだけなのだ。31:4 今も、彼らはわたしたちのことを、どれほど多くの人々に知らせていることだろう。わたしたちが集まり、彼らに逆らって語り合っていることまで、だれかが出て行って知らせるより前に知らせているのだ。しかし、そのくらいのことは、足の速い子供にもできる。遅れている者を追い越せばよいのだ。31:5 わたしの言うのは、こういうことだ。だれかがテーベ地方から、あるいはほかのどこかの地方から歩き始めるとしよう。歩き始める前には、彼らはその人が歩き出すかどうかを知らない。しかし、歩いているのを見ると、先に走って行き、その人が着く前に知らせる。こうして、その人たちは何日か後にやって来るのだ。しかし、歩いていた人々が引き返すこともよくある。そのときには、彼らはうそをついたことになる。

32:1 同じように、川の水についても、彼らはときどきたわごとを言う。じっさい、彼らはエチオピヤの地方で大雨が降るのを見ている。川の増水がそこから起こることも知っている。それで、水がエジプトに着く前に、先に走って来て告げるのだ。32:2 人間も、彼らと同じくらい速く走ることができたなら、同じことを言えただろう。ダビデの見張りの者は高い所に上ったので、下にとどまっている者よりも先に、やって来る者を見た（サムエル記下一八・二四）。また、先に走って来た者自身も、ほかの者たちより先に告げたが、まだ起こっていないことを告げたのではなかった。32:3 すでに道を来ていること、起こりつつあることを告げたのだ。それと同じように、悪霊たちも、ただ欺くためだけに、わざわざ骨を折って、ほかの人々に知らせる。しかし、摂理がその間に、水や旅人について何かを定めることもある。摂理にはそれができるからだ。そうなれば、悪霊たちはうそをついたことになり、彼らに耳を傾けた人々は欺かれたことになる。

33:1 ギリシヤ人の神託も、こうして成り立っていた。ギリシヤ人は、昔はこうして悪霊たちに惑わされていた。しかし、こうして、その惑わしも今ではもうやんでいる。主がおいでになり、悪霊たちを、その悪だくみもろとも無力になさったからだ。33:2 じっさい、彼らは自分からは何も知らない。盗人のように、ほかの所で見たことを言い伝えるだけだ。彼らは、前もって知る者というより、むしろ推し量る者なのだ。だから、彼らがときにそのような真実を言っても、それで彼らに感心する者があってはならない。33:3 じっさい、医者たちも、病気について経験がある。それで、同じ病気をほかの人々に見ると、慣れから推し量って、前もって告げることがよくある。また、船の舵取りや農夫も、慣れから空模様を見て、嵐になるか晴れるかを前もって告げる。しかし、だからといって、彼らが神の霊感によって前もって告げているのだと言う人はいないだろう。経験と慣れによって告げているのだ。33:4 だから、悪霊たちがときに同じように推し量って言っても、そのために彼らに感心してはならない。彼らに耳を傾けてもならない。じっさい、これから起こることを彼らから何日も前に知ったところで、聞く人々に何の役に立つだろうか。また、たとえ本当に知ることができるとしても、そのようなことを知るのに、どんな熱意を傾ける値打ちがあるだろうか。というのも、それは徳を生み出すものではないし、良い品性のしるしでも決してないからだ。33:5 じっさい、わたしたちのだれも、知らないからといって裁かれはしない。学んで知ったからといって、幸いとされることもない。人がそれぞれ裁かれるのは、信仰を保ったかどうか、戒めを心から守ったかどうか、という点においてなのだ。

34:1 だから、このようなことを重んじてはならない。前もって知るために、修行し、労苦するのでもない。よく生きて、神に喜ばれるためにそうするのだ。また、祈るのも、前もって知るためであってはならない。それを修行の報いとして求めてもならない。悪魔に打ち勝つために、主がわたしたちと共に働いてくださるように祈るのだ。34:2 しかし、もしどうしても前もって知ることを気にかけるのなら、心を清く保とう。じっさい、わたしはこう信じている。あらゆる面で清く、本性にかなったあり方に立つ魂は、見通す力を得る。そして、悪霊たちよりも多くのことを、より遠くまで見ることができる。その魂には、物事を明らかにしてくださる主がおられるからだ。エリシャの魂がそうだった。ゲハジのしたことを見、自分のかたわらに立つ軍勢を見たのだ（列王紀下五・二六、六・一七）。

35〜38章　聖なる者たちの幻と悪霊たちのまぼろしを見分ける

35:1 だから、彼らが夜あなたがたのところにやって来て、これから起こることを語ろうとしても、耳を傾けてはならない。「われわれは天使だ」と言っても同じだ。彼らはうそをついているからだ。また、彼らがあなたがたの修行をほめ、あなたがたを幸いな者だと言っても、従ってはならない。まったく相手にしてもならない。むしろ、自分と家とに印をして、祈りなさい。そうすれば、彼らが消えうせるのを見るだろう。じっさい、彼らはおじけやすく、主の十字架のしるしをひどく恐れている。救い主がその十字架で彼らを裸にし、さらしものになさったからだ。35:2 彼らがさらにずうずうしく居座り、踊り回ったり、まぼろしで姿を変えたりしても、おじけてはならない。すくんではならない。善い者たちであるかのように、彼らに耳を傾けてもならない。じっさい、善い者たちの現れと悪い者たちの現れは、神がそうさせてくださるので、たやすく見分けることができるのだ。35:3 じっさい、聖なる者たちの幻は騒がしくない。『争わず、叫ばず、だれも彼らの声を聞かない』からだ（マタイ一二・一九）。それは静かに穏やかに起こるので、魂にはすぐに喜びと歓喜と勇気が生まれる。わたしたちの喜びであり、父なる神の力である主が、彼らと共におられるからだ。魂の思いも乱れず、波立たずにとどまる。こうして魂は、自分自身によって照らされ、現れた者たちを見るのだ。35:4 というのも、神のことと来たるべきことへのあこがれが、魂に湧き起こるからだ。魂は、もしできるなら、彼らと共に去って行き、それらのものに結ばれたいと、ひたすら願うだろう。また、人間であるために、善い者たちの幻を恐れる人がいても、現れた者たちは、愛によってすぐにその恐れを取り去る。ガブリエルはザカリヤにそうした（ルカ一・一三）。聖なる墓で女たちに現れた天使もそうした（マタイ二八・五）、福音書で羊飼いたちに『恐れるな』と言った天使もそうした（ルカ二・一〇）。35:5 じっさい、その人々の恐れは、魂のおじけから来るのではない。自分よりすぐれた者たちが来ていると知ることから来るのだ。聖なる者たちの幻とは、このようなものだ。

36:1 しかし、悪い者たちの襲来とまぼろしは騒がしい。物音と響きと叫び声を伴い、しつけのない若者や盗賊たちが騒ぎ立てるときのようだ。そこから、すぐに魂のおじけが生じる。思いの乱れと混乱、ふさぎ込み、修行者たちへの憎しみ、気落ち、悲しみ、身内の者たちの思い出、死への恐れが生じる。さらには、悪への欲、徳をおろそかにすること、品性の定まらなさが生じるのだ。36:2 だから、何者かを見て恐れても、すぐに恐れが取り去られ、代わりに言葉につくせない喜びが生まれたとしよう。快活さ、勇気、立ち直り、思いの静けさ、わたしが先に言ったほかのこと、雄々しさと神への愛も生まれる。そのときは、安心して祈りなさい。じっさい、魂の喜びと落ち着きは、そこに来ている方が聖なる者であることを示しているのだ。36:3 このように、アブラハムは主を見て喜んだ（ヨハネ八・五六）。また、ヨハネも、神の母マリヤの声がしたとき、喜びおどった（ルカ一・四一、四四）。しかし、何者かが現れて騒ぎが起こり、外から物音がしたとしよう。この世のもののまぼろしや死のおどしがあり、わたしが先に言ったようなことが起こる。そのときは、悪い者たちが襲って来たのだと知りなさい。

37:1 じっさい、次のこともあなたがたの見分けるしるしとしなさい。魂がおじけたままでいるなら、それは敵たちが来ているのだ。悪霊たちは、そのような人々からおじけを取り去りはしないからだ。天使のかしらである大いなるガブリエルが、マリヤとザカリヤにしたようにはしない。墓で女たちに現れた天使がしたようにもしない。むしろ、人々がおじけているのを見ると、まぼろしを増し加える。いっそうすくませ、ついには襲いかかって、「ひれ伏して拝め」とあざけるためだ。37:2 さて、彼らはこのようにしてギリシヤ人を欺いた。じっさい、こうして彼らは、ギリシヤ人のあいだで、偽りの名の神々とみなされるようになったのだ。しかし主は、わたしたちが悪魔に欺かれるままにはなさらなかった。悪魔が主にこのようなまぼろしを見せたとき、主は悪魔を叱ってこうお語りになっ

た。『サタンよ、わたしの後ろに退け。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある』（マタイ四・一〇）。37:3だから、この悪賢い者は、このことのために、わたしたちからいっそう見下げられなければならない。じっさい、主がお語りになったことは、わたしたちのためになさったことなのだ。悪霊たちが、わたしたちからも同じ言葉を聞いて、その言葉で彼らをお叱りになった主のゆえに、くつがえされるためだ。

38:1また、悪霊を追い出すことを誇ってはならない。いやしを行うことで思い上がってもならない。悪霊を追い出す人だけに感心し、追い出さない人を軽んじてもならない。むしろ、それぞれの人の修行をよく見て、見ならい、競うか、あるいは正すかしなさい。38:2じっさい、しるしを行うことは、わたしたちのわざではない。救い主のわざだ。現に、救い主は弟子たちにこうお語りになった。『悪霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい』（ルカ一〇・二〇）。38:3じっさい、名が天にしるされていることは、わたしたちの徳と生き方のあかしだ。しかし、悪霊を追い出すことは、それを与えてくださった救い主の恵みなのだ。38:4徳ではなく、しるしを誇って、こう言う者たちがいる。『主よ、わたしたちはあなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』（マタイ七・二二）。だから、主はその者たちにお答えになった。『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』（マタイ二五・一二）。38:5じっさい、主は不敬虔な者たちの道をご存じないのだ。総じて、先にも言ったように、霊を見分ける賜物を受けられるように祈らなければならない。書かれているとおり、すべての霊を信じることのないためだ（第一ヨハネ四・一）。

39〜43章　アントニオスが見た悪霊たちのたくらみ

39:1 さて、わたしは黙っていたかった。自分からは何も話さず、これまで語ったことだけで済ませたかった。しかし、わたしがただ口先でこれらのことを言っていると、あなたがたが思わないようにしたい。経験と真実からこれらを語っているのだと、信じてもらいたい。だから、たとえ愚か者のようになっても話そう。聞いておられる主は、わたしの良心が清いことをご存じだ。わたしが、自分の見た悪霊たちのたくらみをもう一度話すのは、自分のためではない。あなたがたへの愛と励ましのためだ。主はそのこともご存じだ。39:2 何度、彼らはわたしを幸いな者だと言ったことか。そのたびに、わたしは主の名によって彼らをのろった。何度、彼らは川の水について前もって告げたことか。そのたびに、わたしは「それが、おまえたちに何のかかわりがあるのか」と言い返した。あるときは、彼らはおどしながらやって来て、武具に身を固めた兵士のようにわたしを取り囲んだ。39:3 また別のときには、馬と獣と這うもので家を満たした。わたしは詩篇を歌った。『ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。しかしわれらは、われらの神、主のみ名によって大いなる者とされる』（詩篇二〇・七）。すると、主が祈りによって彼らをくつがえしてくださった。39:4 あるとき、彼らは光のまぼろしをまとって、暗闇の中にやって来た。そして「アントニオスよ、おまえに光をともしに来たぞ」と言った。しかし、わたしは目を閉じて祈った。すると、たちまち不敬虔な者たちの光は消えた。39:5 数か月たつと、彼らは詩篇を歌い、聖書の言葉を語っているかのようにしてやって来た。しかし、わたしは『耳の聞こえない者のように聞かず』にいた（詩篇三八・一三）。あるとき、彼らは修道の住まいを揺り動かした。しかし、わたしは心を少しも動かされずに祈っていた。39:6 その後、彼らはまたやって来て、手を打ち鳴らし、口笛を吹き、踊り回った。しかし、わたしが祈り、横になったままひとりで詩篇を歌っていると、彼らはすぐに、力が尽きたかのように嘆き、泣き始めた。わたしは、彼らのずうずうしさと狂気をくじいて、さらしものになさった主をほめたたえた。

40:1 あるとき、ひどく背の高い悪霊が、まぼろしを伴って現れた。そして、ずうずうしくも「わたしは神の力だ」と言い、「わたしは摂理だ。おまえに何を授けてほしいか」と言った。しかし、わたしはそのとき、いっそう強くその悪霊に息を吹きかけ、キリストの名を唱えて、打ちかかろうとした。打ったと思うと、たちまちあれほど大きな者が、自分のすべての悪霊たちと共に、キリストの名によって消えうせた。40:2 あるとき、わたしが断食していると、欺く者が修道士のような姿で、パンのまぼろしを持ってやって来た。そして勧めて言った。「食べなさい。多くの労苦はもうやめなさい。おまえも人間だ。このままでは弱ってしまうぞ」40:3 しかし、わたしはその策略に気づいて、立ち上がって祈った。すると、欺く者はそれに耐えられなかった。じっさい、力を失って、煙のように戸口から出て行くのが見えた。荒野で、何度、欺く者は金のまぼろしを見せたことか。わたしがそれに触れ、目を向けさえすればよいと思ってのことだ。40:4 しかし、わたしがその者に向かって詩篇を歌うと、その者は溶けるように消えていった。何度も、彼らはわたしを打ちたたいた。わたしは「何ものもわたしをキリストの愛から離れさせることはできない（ローマ八・三五）」と言った。すると、むしろ彼らのほうが、その後、互いに打ち合うのだった。40:5 しかし、彼らをやめさせ、無力にしたのは、わたしではなかった。主だった。『わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た』とお語りになった主だ（ルカ一〇・一八）。子供たちよ、わたしは使徒の言葉を思い起こして、これらのことを自分の身に当てはめて語った（第一コリント四・六）。あなたがたが、修行においてうみ疲れず、悪魔とその悪霊たちのまぼろしを恐れないことを学ぶためだ。

41:1 わたしは語って愚か者になったのだから、これも、あなたがたが安全で、恐れずにいられるように受け取りなさい。わたしを信じなさい。わたしは偽りを言っていないからだ。あるとき、修道の住まいで、だれかがわたしの戸をたたいた。出て行くと、背の高い、そびえるような者が見えた。41:2 「おまえはだれ

か」と尋ねると、その者は「わたしはサタンだ」と言った。「では、なぜここに来たのか」と言うと、その者は言った。「なぜ修道士たちも、ほかのすべてのキリスト者も、むだにわたしを責めるのか。なぜ絶えずわたしをのろうのか」。わたしが「では、なぜおまえは彼らを悩ますのか」と言うと、その者は言った。「わたしが彼らを悩ましているのではない。彼らが自分で自分を騒がせているのだ。じっさい、わたしは弱くなってしまった。41:3 彼らは『敵の剣はとこしえに尽き、あなたは町々を滅ぼされた』と読まなかったのか（詩篇九・六）。わたしにはもう場所もない。矢も、町もない。どこにもキリスト者がいるようになってしまった。ついには荒野まで修道士で満ちている。41:4 彼らは自分で自分を守るがいい。むだにわたしをのろわないでもらいたい」。そのとき、わたしは主の恵みに驚いて、その者に言った。「おまえはいつも偽りを言う者で、決して真実を語らない。それなのに今度ばかりは、心ならずも本当のことを言った。じっさい、キリストが来られて、おまえを弱い者になさり、倒して裸になさったのだ」。41:5 その者は救い主の名を聞くと、その名から来る焼けつくような熱に耐えられず、姿を消した。

42:1 このように悪魔自身も、自分には何もできないと認めている。だから、わたしたちは、悪魔もその悪霊たちも、まったく見下げなければならない。さて、敵はその犬どもと共に、これほど多くの悪だくみを持っている。しかし、わたしたちは彼らの弱さを学んだのだから、彼らを見下げることができる。42:2 だから、このようにして、心のうちで先にくずおれることのないようにしよう。魂のうちでおじけた考えを抱かず、自分で恐れを作り出さないようにしよう。「悪霊が来て、わたしをくつがえしはしないか。持ち上げて倒しはしないか。急に現れて、わたしをかき乱しはしないか」などと言わないようにしよう。42:3 こうしたことは、まったく思いめぐらさないようにしよう。滅びる者のように悲しまないようにしよう。むしろ、救われる者として勇気を出し、いつも喜ぼう。そして、魂のうちで考えよう。悪霊たちを敗走させ、無力になさった主が、わたしたちと共におられるのだと。42:4 また、いつも心に留め、思いめぐらそう。主がわたしたちと共におられる以上、敵たちはわたしたちに何もできないのだと。じっさい、彼らは来て、わたしたちがどのような者であるかを見いだす。そして、自分たちもそれに応じた者となって、わたしたちに向かって来る。わたしたちのうちに見いだす考えに合わせて、まぼろしをも似せて作るのだ。42:5 だから、わたしたちがおじけ、うろたえているのを見いだすと、彼らはすぐに踏み込んで来る。盗賊が守りのない場所を見つけて押し入るのと同じだ。そして、わたしたちが自分で考えていることを、さらに上乗せして行うのだ。42:6 じっさい、わたしたちが恐れ、おじけているのを見ると、彼らはまぼろしとおどしで、いっそうおじけを大きくする。そうなると、みじめな魂は、ついにはそれらに苦しめられる。しかし、わたしたちが主にあって喜んでいるのを、彼らが見いだしたとしよう。わたしたちが来たるべき良いことを考え、主のことを思いめぐらしている。すべては主の御手の中にあり、悪霊はキリスト者に何の力もふるえず、だれに対してもまったく力を持たないと、わきまえている。そのときは、魂がこのような思いで守り固められているのを見て、彼らは恥じ入って引き下がるのだ。42:7 このように、敵は、ヨブが垣で囲まれているのを見て、彼から退いた。しかし、ユダがこれらの思いを持たず、裸でいるのを見つけて、とりこにした。だから、敵を見下げようと思うなら、いつも主のことを考えよう。魂はいつも望みによって喜ぶがよい。そうすれば、悪霊たちのたわむれが煙のようになり、悪霊たちが追いかけて来るどころか、むしろ逃げて行くのを見るだろう。42:8 じっさい、先にも言ったように、彼らはひどくおじけやすい。自分たちのために用意されている火を、いつも待ち受けているからだ。

43:1 また、彼らに対して恐れずにいるために、次のことを、あなたがた自身のうちにしるしとして持っていなさい。何かのまぼろしが現れたら、おじけて先にくずおれてはならない。それがどのようなものであっても、勇気を出して、まず「あなたはだれか。どこから来たのか」と尋ねなさい。それが聖なる者たちの幻なら、彼らはあなたを安心させ、あなたの恐れを喜びに変える。しかし、悪魔から出たものなら、心が力強いのを見て、すぐに弱ってしまう。じっさい、ともかく「あなたはだれか。どこから来たのか」と尋ねることが、心の乱れていないしるしなのだ。このように、ヌンの子ヨシュアは尋ねて知った（ヨシュア五・一三〜一四）。敵も、問いただしたダニエルの目を逃れられなかった（スザンナ五一〜五九）。

44〜48章　山々の修道士たちと、迫害の中のアレクサンドリア

44:1 アントニオスがこのように語ると、みなが喜びました。ある人々は徳への愛を増し、ある人々からはおろそかにする心が追い払われ、またほかの人々はうぬぼれをやめました。そしてみなが、悪霊たちのはかりごとを見下げるべきだと得心しました。霊を見分けるために主がアントニオスにお与えになった恵みに、感心したのです。44:2 こうして、山々にある修道の住まいは、天幕のようでした。神をたたえる歌い手たちの群れで満ちた天幕です。そこにいる人々は、詩篇を歌い、書を読んで学び、断食し、祈っていました。来たるべきものへの望みに喜び躍り、施しをするために働いていました。そして、互いに愛と和合を保っていました。44:3 それはまことに、ほかから離れて独り立つ、神を敬う心と義の国のように見えました。じっさい、そこには不正を行う者も、不正を受ける者もいませんでした。税を取り立てる者の責め立てもありませんでした。かえって、修行者は大勢いても、みなの思いは一つで、徳に向かっていました。それで、修道の住まいと、修道士たちのこのような秩序を見た人が、次の言葉をふたたび叫ぶほどでした。『ヤコブよ、あなたの家は、イスラエルよ、あなたの天幕は、なんと麗しいことか。44:4 陰をつくる谷間のよう、川べの園のよう、主が張られた天幕のよう、流れのほとりの香柏のようだ』（民数記二四・五〜六）。

45:1 けれども、アントニオス自身は、いつものように自分の修道の住まいにひとりで退き、修行をいっそう厳しくしました。そして日ごとに嘆いていました。天にある住まいを思いめぐらし、それを慕い求めていたからです。また、人の生涯が一日限りのはかないものであることを、見つめていたからです。45:2 じっさい、食べたり眠ったり、体のほかの必要を満たしに行こうとしたりするとき、彼は恥じ入りました。魂の知性のことを考えたからです。現に、ほかの多くの修道士たちと食事をしようとしていたときのことです。彼は霊の食物を思い出して辞退し、彼らから遠く離れて行きました。そういうことが何度もありました。ほかの人に食べているところを見られたら、顔が赤らむと思ったのです。それでも、体の必要のために、ひとりで食べてはいました。兄弟たちと一緒に食べることも、何度もありました。そのようなことには恥じらいを覚えましたが、人のためになる話では、はばかることなく語りました。45:3 また、彼はよく言っていました。「暇は、すべて体よりもむしろ魂に与えなければならない。必要のために、わずかな時を体に許すのはよい。しかし、全体としては、むしろ魂のために時を用い、魂の益を求めなければならない。魂が体の快楽に引きずり下ろされず、むしろ体が魂に従わせられるためだ。じっさい、救い主がお語りになった次の言葉は、このことなのだ。『何を食べようかと、魂のことで思いわずらい、何を着ようかと、からだのことで思いわずらうな。45:4 あなたがたも、何を食べ、何を飲もうかと、あくせくするな、また気を使うな。これらのものは皆、この世の異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることを、ご存じである。ただ、まず御国を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう』（ルカ一二・二二、二九〜三一）」

46:1 その後、当時マクシミヌスのもとで起こった迫害が、教会を襲いました。聖なる殉教者たちがアレクサンドリアへ引かれて行くと、アントニオスも修道の住まいを離れて、ついて行きました。彼は言いました。「わたしたちも行こう。呼び出されたら戦うために。そうでなくても、戦う人々を見届けるために」46:2 彼は殉教することを慕い求めていました。しかし、自分から身を引き渡そうとはせず、鉱山や牢獄で、信仰を告白した人々に仕えました。また法廷でも、大いに熱意を尽くしました。呼び出されて戦う人々には、油を塗るようにして意欲をかき立てました。彼らが殉教していくときには、迎えて、全うされるまで送って行きました。46:3 現に、裁判官は、彼と彼の仲間たちが恐れを知らず、このことに熱意を注いでいるのを見て、命じました。修道士はだれも法廷に姿を見せてはならない、町にとどまることもまったく許さない、と。46:4 それで、ほかの者たち

はみな、その日は身を隠すことにしました。ところが、アントニオスがそれをどれほど気にかけたかといえば、かえって上着を洗いさえしたほどでした。そして次の日には、前のほうの高い所に立ち、総督の前に晴れやかな姿を見せたのです。46:5 みながこれに驚きました。総督もそれを見ながら、隊列と共に通り過ぎて行きました。それでも彼は、びくともせずに立ち続け、わたしたちキリスト者の意欲を示しました。じっさい、先にも言ったように、彼自身も殉教することを祈り求めていたのです。46:6 彼は、殉教しなかったことを悲しんでいるように見えました。しかし主は、わたしたちとほかの人々の益のために、彼を守っておられたのです。彼が聖書から学んだ修行においても、多くの人々の教師となるためでした。46:7 じっさい、彼の暮らしぶりを見るだけで、多くの人がその生き方にならおうと熱心に努めました。さて、彼はまたいつものように、信仰を告白した人々に仕えました。彼らと共につながれている者のように、その奉仕に骨を折ったのです。

47:1 やがて迫害がやみ、幸いな監督ペトロスが殉教すると、彼はその地を去り、また修道の住まいに退きました。そして、そこで日ごとに良心において殉教し、信仰の戦いを戦っていました。47:2 じっさい、彼は多くの、しかもいっそう厳しい修行をしていました。というのも、彼はいつも断食をしていたからです。また衣は、内には毛の衣を、上には皮の衣を着ていて、それを死ぬまで保ちました。体の汚れを落とすために水で洗うことはなく、足さえまったく洗いませんでした。必要もないのに足をただ水に浸けることさえ、自分に許しませんでした。それどころか、彼が裸になったところをだれも見たことがありませんでした。アントニオスの裸の体を見た者は、彼が死んで葬られたとき以外には、だれもいなかったのです。

48:1 さて、彼が退いて、しばらくのあいだ外に出ず、だれも迎え入れないと決めていたときのことです。マルティニアノスという、兵士たちを率いる長がやって来て、アントニオスを煩わせました。というのも、その人には悪霊に悩まされている娘がいたからです。マルティニアノスは長いあいだ戸をたたき続け、出て来て娘のために神に祈ってほしいと願いました。アントニオスは戸を開けようとはしませんでしたが、上からのぞいて言いました。「人よ、なぜわたしに向かって叫び立てるのか。わたしもあなたと同じ人間だ。48:2 しかし、あなたが、わたしの仕えているキリストを信じているなら、行きなさい。そして、信じるとおりに神に祈りなさい。そうすれば、そのとおりになる」。するとその人は、すぐに信じてキリストを呼び求め、帰って行きました。娘は悪霊から清められていました。48:3 主は彼を通して、ほかにも多くのことをなさいました。『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』とお語りになった方です（ルカ一一・九）。じっさい、苦しむ人々の多くは、彼が戸を開けなくても、ただ修道の住まいの外で眠っていました。そして、信じて真心から祈り、清められたのです。

49〜53章　内の山と、獣たち

49:1 さて、アントニオスは、自分が多くの人に煩わされ、望むとおりに退くことも許されないのを見ました。そして、主が自分を通してなさることのために、自分が高ぶるか、ほかのだれかが彼を実際以上に思うのではないかと恐れました。それで、よく考えて、上テーベ地方へ、自分を知らない人々のところへ上って行こうと思い立ちました。49:2 そこで、兄弟たちからパンを受け取り、川の岸辺に座って、舟が通りかからないかと見ていました。乗り込んで、舟の人々と一緒に上って行くためです。彼がこう考えていると、上からある声が彼にありました。「アントニオスよ、どこへ行くのか。何のためか」。彼はうろたえませんでした。たびたびこのように呼ばれることに慣れていたので、耳を傾けて答えました。「群衆がわたしを静かにさせてくれないからです。それで、上テーベ地方へ上って行きたいのです。ここでわたしに起こる多くの煩わしさのためです。とりわけ、わたしの力を超えることを人々から求められるからです」。49:3 声は彼に言いました。「テーベ地方へ上っても、思いめぐらしているように牛飼いの地へ下っても、もっと多くの、二倍の労苦を忍ばなければならない。しかし、本当に静かに過ごしたいなら、今、内の荒野へ上って行きなさい」。49:4 アントニオスが「それでは、だれがわたしに道を教えてくれるのですか。わたしはその道に不案内なのですから」と言うと、声はすぐに、その道を行こうとしているサラセン人たちを彼に示しました。そこでアントニオスは近づいて、彼らのそばへ行き、一緒に荒野へ行かせてほしいと頼みました。49:5 彼らは、摂理の命令によるかのように、快く彼を迎え入れました。彼は三日三晩彼らと共に旅をして、非常に高い山に着きました。山のふもとには水がありました。とても澄んでいて、甘く、たいへん冷たい水でした。そのまわりには平地があり、手入れされていないなつめやしが少し生えていました。

50:1 アントニオスは、神に動かされたかのように、その場所を愛しました。じっさい、ここが、川の岸辺で彼に語りかけた者が示した場所だったのです。さて、彼は初めのうちは、道連れの人々からパンを受け取り、ほかにだれも共にいない中で、山にひとりでとどまっていました。というのも、そこを自分の家と見定めたかのように、それからはその場所に住み続けたからです。50:2 サラセン人たち自身も、アントニオスの意欲を見て、わざわざその道を通るようになり、喜んで彼にパンを運んで来ました。また、そのころの彼には、なつめやしから得るわずかで粗末な慰めもありました。50:3 その後、兄弟たちはその場所を知り、子供たちが父を思い起こすようにして、彼に物を送り届けようと心を配りました。しかしアントニオスは、パンのために何人かがそこで手間をかけ、労苦を忍んでいるのを見ました。そこで、このことでも修道士たちをいたわろうとして、ひとり思案しました。そして、訪ねて来る人々の何人かに、くわと斧と少しの穀物を持って来てくれるよう頼みました。50:4 それが届くと、彼は山のまわりの土地を歩き回り、ごく小さな、耕すのに適した場所を見つけて耕しました。そして、その水で存分に潤すことができたので、種をまきました。50:5 毎年そうして、彼はそこからパンを得ていました。そして、このことでだれにも負担をかけず、すべての事につき自分を人の重荷にならない者として保っていることを喜んでいました。しかしその後、また人々がやって来るのを見て、彼はわずかな野菜も育てました。訪ねて来る人が、あのつらい道のりの疲れを少しでも慰められるようにするためです。50:6 さて、初めのうちは、荒野の獣たちが水を求めてやって来て、たびたび彼のまいた種と畑を荒らしました。そこで彼は、獣の一頭を穏やかにつかまえて、獣たちみなに言いました。「なぜおまえたちはわたしを害するのか。わたしはおまえたちを少しも害していないのに。立ち去れ。主の名によって、もうここにあるものに近づいてはならない」。50:7 それからは、その命令を恐れたかのように、獣たちはもうその場所に近づきませんでした。

51:1 こうして彼はひとり内の山にいて、祈りと修行に専心していました。彼に仕えていた兄弟たちは、月ごとに入って来て、オリーブの実と豆と油を運ばせて

ほしいと彼に願いました。彼はもう年老いていたからです。51:2そこで暮らしながら、彼がどれほどの戦いを耐え忍んだかを、わたしたちは彼のもとへ訪ねて来た人々から知りました。それは、書かれているとおり、血肉に対するものではなく、立ち向かう悪霊たちに対する戦いでした（エペソ六・一二）。51:3じっさい、そこでも人々は、騒ぎと多くの声と、武器のぶつかるような物音を聞きました。また、夜には山が獣で満ちるのを見ました。そして、彼が目に見える者たちと戦うかのように戦い、その者たちに立ち向かって祈っているのを見たのです。51:4彼は訪ねて来る人々を励まし、自分はひざをかがめ、主に祈って戦いました。それはまことに驚くべきことでした。このような荒野にひとりでいながら、悪霊たちが襲って来てもひるみませんでした。そこにあれほど多くの四つ足の獣や這うものがいても、その荒々しさを恐れなかったのです。かえって、書かれているとおり、彼はまことに主に信頼して、シオンの山のようでした（詩篇一二五・一）。動かされることのない、波立たない心を保っていました。それで、むしろ悪霊たちが逃げ去り、書かれているように、野の獣は彼と和らいだのです（ヨブ五・二三）。

52:1悪魔は、ダビデが歌っているように、アントニオスをうかがい、彼に向かって歯ぎしりしました（詩篇三七・一二）。しかしアントニオスは救い主から慰めを受け、悪魔の悪だくみとさまざまな策略から害を受けずにいました。52:2さて、彼が夜に眠らずにいると、悪魔は獣を放ちました。その荒野のほとんどすべてのハイエナが、ねぐらから出て来て、彼を取り囲みました。彼はその真ん中にいました。どれも口を開け、かみつこうと脅しました。彼は敵の手口を悟って、みなに言いました。「おまえたちがわたしに対する力を受けたのなら、わたしはおまえたちに食われる用意ができている。しかし、悪霊たちに差し向けられたのなら、ぐずぐずせずに立ち去れ。わたしはキリストのしもべなのだから」52:3アントニオスがこう言うと、ハイエナたちは、ことばの鞭に追い立てられるかのように逃げ去りました。

53:1それから幾日かたって、彼が仕事をしていたときのことです（彼は骨折って働くことも気にかけていたからです）。だれかが戸口に立って、仕事に使っていた縄を引っぱりました。というのも、彼はかごを編み、それを訪ねて来る人々に、運んでもらう物のお返しとして渡していたからです。53:2彼が立ち上がると、一匹の獣が見えました。腿までは人に似ていましたが、脚と足はろばのようでした。アントニオスは、ただ自分に印をして言いました。「わたしはキリストのしもべだ。おまえがわたしに向けて遣わされたのなら、見よ、わたしはここにいる」53:3すると獣は、自分の悪霊たちと共に逃げ去りました。その速さのあまり、倒れて死んでしまうほどでした。獣の死は、悪霊たちが倒れたことでした。53:4じっさい、悪霊たちは、彼を荒野から連れ下ろそうと、あらゆることに努めましたが、できなかったのです。

54〜57章　荒野の水と、日ごとの反省

54:1 あるとき、アントニオスは修道士たちから、山を下りて来て、久しぶりに自分たちとその住む所を訪ねてほしいと頼まれました。そこで、迎えに来た修道士たちと共に旅に出ました。らくだが一頭、彼らのためにパンと水を運んでいました。54:2 というのも、その荒野は一面に水がなく、飲める水はどこにもないからです。あるのは、彼らが水をくんで来たあの山、彼の修道の住まいのある山だけです。54:3 ところが、途中で水が尽きてしまいました。暑さもひどく厳しかったので、みな命が危うくなりかけました。というのも、あたりを歩き回っても水は見つからず、彼らはもう歩くこともできなくなったからです。彼らは地面に横たわり、生きる望みを捨てて、らくだも放してしまいました。54:4 老人は、みなが危うくなっているのを見て、ひどく心を痛め、うめきました。そして、彼らから少し離れて行き、ひざをかがめ、両手を差し伸べて祈りました。すると主は、彼が祈っていたその場所に、すぐに水を湧き出させてくださいました。こうして、みなは飲んで息を吹き返しました。そして皮袋を満たしてから、らくだを探して見つけました。というのも、たまたま綱が石に巻きつき、それで引き止められていたからです。54:5 そこで、らくだを連れて来て水を飲ませ、その背に皮袋を載せて、無事に旅を終えました。彼が外の修道の住まいに着くと、みなは父を見るようにして彼を迎え、あいさつしました。彼のほうも、山から旅の糧を携えて来たかのように、言葉で彼らをもてなし、益になるものを分け与えました。54:6 山々には再び喜びがあり、進歩への熱意があり、互いの信仰による励ましがありました。それで、彼自身も喜びました。修道士たちの意欲を見たからです。また、妹がおとめのまま年を重ね、彼女もまたほかのおとめたちを導く者となっているのを見たからです。

55:1 さて、幾日かたって、彼はまた山に入りました。それからは、多くの人が彼のもとを訪ねて来るようになり、病に苦しむ人々も思い切って入って来ました。訪ねて来るすべての修道士に、彼はいつもこう命じていました。「主を信じ、主を愛しなさい。汚れた思いと肉の快楽から、自分を守りなさい。また、箴言に書かれているとおり、腹を満たすことに欺かれてはならない（箴言二四・一五）。虚栄を避け、絶えず祈りなさい。眠る前にも、眠った後にも、詩篇を歌いなさい。聖書の戒めをそらで覚え、聖徒たちの行いを思い起こしなさい。戒めによって思い起こさせられた魂が、聖徒たちにならう熱意によって整えられるためだ」55:2 とりわけ、彼は使徒の言葉をいつも口ずさむよう勧めて、こう言いました。「『憤ったままで、日が沈むようであってはならない』（エペソ四・二六）。これは、すべての戒めについて言われたことだと考えなさい。憤ったままでだけでなく、ほかのどんな罪を負ったままでも、わたしたちの上に日が沈むことのないようにするためだ。じっさい、昼の悪のことで太陽が、夜の罪や、思いめぐらしただけのことでさえ月が、わたしたちを責めないのがよい。それは必要なことでもある。55:3 それで、このことがわたしたちのうちに保たれるように、使徒の言葉を聞いて守るのがよい。使徒はこう言っているからだ。『自分を反省し、自分を吟味するがよい』（第二コリント一三・五）。だから、昼の行いと夜の行いの勘定を、めいめいが日ごとに自分でつけなさい。罪を犯したのなら、やめなさい。罪を犯さなかったのなら、誇ってはならない。かえって、善にとどまって、怠らずにいなさい。幸いな使徒パウロが言ったとおり、隠れたことをお探りになる主がおいでになるまでは、隣人を罪に定めてはならない。自分を義としてもならない（第一コリント四・五、ローマ二・一六）。55:4 というのも、自分のしていることが自分でも分からないことが、たびたびあるからだ。わたしたちには分からなくても、主はすべてを見抜いておられる。だから、さばきは主にゆだねて、互いに苦しみを共にしよう。互いの重荷は負い合おう（ガラテヤ六・二）。しかし、自分自身は反省し、足りないところを満たそうと努めよう。55:5 罪を犯さないための守りとして、次の心がけも持とう。互いに打ち明けるつもりで、わたしたちはめいめい、自分の行いと魂の動きを書き留めておこう。そして、安心しな

さい。人に知られることを恥じて、わたしたちは必ず罪を犯すのをやめ、悪いことを思いめぐらすことさえまったくなくなるのだから。55:6 じっさい、罪を犯しながら、人に見られたいと思う者がいるだろうか。罪を犯した者は、隠れていたいと思って、むしろ偽りを言うではないか。互いに見ているなら、わたしたちは淫行をしないだろう。それと同じように、互いに打ち明けるつもりで思いを書き留めるなら、汚れた思いからなおさら自分を守るようになる。知られることを恥じるからだ。55:7 だから、書いたものを、修行仲間の目の代わりにしよう。見られるのを恥じるように、書くことも恥じて、悪いことをまったく思いめぐらさずにいるためだ。このように自分を形づくれば、わたしたちはからだを服従させ、主を喜ばせ、敵の策略を踏みつけることができる」

56:1 彼は、訪ねて来る人々にはこのように命じていました。そして、苦しむ人々とは苦しみを共にし、共に祈りました。主は、たびたび、また多くの人のために、彼の祈りを聞き入れてくださいました。彼は、聞き入れられても誇らず、聞き入れられなくてもつぶやきませんでした。かえって、彼自身はいつも主に感謝しました。そして苦しむ人々には、耐え忍ぶよう勧めました。また、こう知るようにとも勧めました。いやしは自分のものでも、そもそも人間のものでもない。お望みになるときに、お望みになる人々にいやしをなさる神だけのものだ、と。56:2 それで、苦しむ人々は、老人の言葉もいやしとして受け入れました。自分たちもなげやりにならず、むしろ耐え忍ぶことを学んだのです。また、いやされた人々は、アントニオスにではなく、ただ神にだけ感謝するよう教えられました。

57:1 現に、宮廷に仕えるフロントンという人が、恐ろしい病にかかっていました。というのも、自分の舌をかみ裂き、目も損なわれようとしていたからです。彼は山に入って来て、自分のために祈ってくれるよう、アントニオスに頼みました。57:2 アントニオスは祈ってから、フロントンに言いました。「行きなさい。そうすれば、いやされる」。しかし、彼は無理にとどまり、幾日も中にいました。アントニオスは言い続けました。「ここにいては、あなたはいやされることができない。57:3 出て行きなさい。エジプトに着けば、あなたに起こるしるしを見るだろう」。彼は信じて出て行きました。そしてエジプトを見たとたんに、病から解かれました。その人は、アントニオスが祈って救い主から知らされた言葉のとおりに、健やかになったのです。

58〜62章　遠くのことを見る

58:1 トリポリス地方のブシリスに、あるおとめがいました。彼女は恐ろしい、ひどく恥ずかしい病にかかっていました。というのも、涙も鼻汁も耳から出る液も、地に落ちるとすぐうじになったからです。そのうえ体は麻痺し、目も普通の形ではありませんでした。58:2 彼女の両親は、修道士たちがアントニオスのもとへ出かけて行くと知りました。そして、長血をわずらう女をおいやしになった主を信じて（マタイ九・二〇）、娘を連れて一緒に行かせてほしいと修道士たちに頼みました。修道士たちは承知しました。両親は娘と共に山の外にとどまり、信仰を告白した人で修道士のパフヌティオスのもとにいました。修道士たちは中に入りました。彼らはおとめのことを知らせようとしました。するとそのとたんに、アントニオスのほうが先に話し始めました。その子の病のことも、その子がどのようにして彼らと旅をして来たかも話したのです。それから修道士たちが、あの人々も中に入れてほしいと頼むと、アントニオスはそれを許さずに言いました。「行きなさい。もし死んでいなければ、その子がいやされているのを見いだすだろう。58:3 というのも、これはわたしのなしとげることではないからだ。もしそうなら、その子はみじめな人間であるわたしのもとにまで来なければならないだろう。いやしは救い主のものなのだ。救い主は、どこででも、ご自分を呼び求める人々にあわれみをお施しになる。58:4 だから、あの子が祈ると、主はそれにうなずいてくださった。そして主の人間への愛は、あの子がその場にいるままで病をおいやしになると、わたしに知らせてくださったのだ」。現に、その不思議は起こりました。修道士たちが出て行くと、両親は喜んでおり、娘はもうすっかり健やかになっていました。

59:1 あるとき、二人の兄弟が山に向かっていましたが、途中で水が尽きてしまいました。一人は死に、もう一人も死にかけていました。もう歩く力がなく、彼もまた死ぬのを待ちながら地面に横たわっていました。59:2 一方、アントニオスは山に座っていましたが、二人の修道士を呼びました（たまたま、二人がそこにいたからです）。そして急き立てて言いました。「水がめを一つ持って、エジプトへ向かう道を走って行きなさい。というのも、こちらへ向かっていた二人のうち、一人はたった今死に、もう一人も、あなたがたが急がなければ死んでしまうからだ。59:3 じっさい、いま祈っていると、このことがわたしに示されたのだ」。そこで修道士たちが出かけて行くと、一人が死んで横たわっていたので、葬りました。もう一人には水を与えて元気づけ、老人のもとへ連れて来ました。というのも、その道のりは一日かかったからです。59:4 では、なぜ、もう一人が死ぬ前に告げなかったのか、と問う人がいるかもしれません。しかし、そう言って問うのは正しくありません。というのも、死の裁きはアントニオスのものではなく、神のものだったからです。神は、あの兄弟については裁きをお下しになり、この兄弟については明らかにしてくださったのです。59:5 アントニオスのものと言える不思議は、ただ一つでした。彼は山に座ったまま、心を慎んで保っており、主は遠くのことを彼に示してくださったのです。

60:1 じっさい、あるときまた、彼は山に座っていて、ふと見上げました。すると空に、だれかが引き上げられて行くのが見えました。迎えに出た者たちが大いに喜んでいるのも見えました。彼はそのような一団に感嘆し、幸いだと思いました。そして、これは何なのかを知りたいと祈りました。60:2 するとすぐ、彼に声がありました。それは、ニトリアの修道士アムーンの魂だというのです。この人は、年老いるまで修行者として生き通した人でした。ニトリアから、アントニオスのいた山までは、十三日の道のりです。60:3 そこで、アントニオスと一緒にいた人々は、老人が驚いているのを見て、わけを知りたいと頼みました。そして、アムーンがたった今死んだと聞きました。というのも、アムーンは彼らによく知られていたからです。彼はたびたびそこへ来ており、また彼によっても多くのしるしが起こっていました。その一つは次のようなことです。あるとき、アムーンはリュコスという川を渡らなければならなくなりました（そのとき、川の水はあ

ふれていました)。そこで彼は、一緒にいたテオドロスに、自分から遠く離れていてくれるよう頼みました。泳いで水を渡るときに、互いの裸を見ないためでした。60:4ところが、テオドロスが離れて行ってしまうと、アムーンは今度は自分の裸を見ることさえ恥ずかしく思いました。こうして彼が恥じて思い悩んでいると、突然、向こう岸に運ばれていました。テオドロスも敬虔な人でしたが、近づいて来て、アムーンが先に渡り、しかも少しも水にぬれていないのを見ました。そこで、どのようにして渡ったのかを知りたいと頼みました。60:5アムーンが言おうとしないのを見ると、テオドロスは彼の足を押さえて、聞き出すまでは放さないと言い張りました。そこでアムーンは、テオドロスの負けん気を見て、とりわけ彼が口にした言葉のために、自分からも求めました。自分が死ぬまで、だれにも言わないでほしいというのです。そのうえで、こう打ち明けました。自分は運ばれて、向こう岸に置かれたのだ。水の上を歩いたのではない。そのようなことは、人間には決してできない。ただ主おひとりと、主がお許しになる人々にだけできることだ。主は大いなる使徒ペテロにそのようになさったのだ、と(マタイ一四・二八〜二九)。60:6さて、テオドロスは、アムーンが死んだ後で、このことを話しました。一方、アントニオスからアムーンの死を聞いた修道士たちは、その日を書き留めておきました。三十日後、兄弟たちがニトリアから上って来たので、彼らは尋ねてみました。すると、アムーンが眠りについたのは、老人がその魂の引き上げられるのを見た、まさにその日その時刻だったと分かりました。60:7そこで、アントニオスのもとの修道士たちも、ニトリアの兄弟たちも、アントニオスの魂の清さに大いに感嘆しました。十三日も離れた所で起こったことを、どのようにして彼はすぐに知り、その魂が引き上げられるのを見たのか、と思ったのです。

61:1また、あるとき、高官のアルケラオスが外の山でアントニオスに会い、ただ祈ってくれるよう頼みました。ラオデキヤに住むポリュクラテイアのためです。彼女はすぐれた、キリストを宿したおとめでした。61:2というのも、彼女は度を越した修行のために、胃とわき腹をひどく病み、体全体が弱っていたからです。そこで、アントニオスは祈りました。高官のほうは、祈りがなされた日を書き留めておきました。そしてラオデキヤに戻ると、おとめが健やかになっているのを見いだしました。61:3彼は、おとめがいつ、どの日に病から解かれたのかを尋ねました。そして、祈りの時を書いておいた紙を取り出しました。答えを聞くと、彼もすぐに紙に書いたものを見せました。みなは驚きました。主が彼女を苦しみから解いてくださったのは、アントニオスが祈っていた、まさにそのときだったと知ったからです。そのとき彼は、救い主の慈しみに彼女のことを願い求めていたのです。

62:1また、彼は自分のもとに来る人々のことを、たびたび幾日も前に、ときには一か月も前に、前もって告げました。その人々が来る理由も告げました。というのも、ただ彼に会うために来る人もあれば、病のために来る人も、悪霊に苦しめられて来る人もいたからです。62:2そして、だれもが道中の労苦を、煩わしいとも損だとも思いませんでした。というのも、だれもが益を受けたと感じて帰って行ったからです。アントニオスは、このようなことを語り、また見ながらも、このことでだれも自分に感嘆しないようにと求めました。むしろ主に感嘆してほしいと言いました。主は、人間にすぎないわたしたちに、力に応じてご自分を知ることを恵んでくださったからです。

63〜66章　空中を通る魂

63:1 あるとき、アントニオスはまた外の修道の住まいへ下って行きました。そして、舟に乗って修道士たちと共に祈ってほしいと頼まれました。すると、彼ひとりだけが、ひどい、たいへん鼻をつく悪臭に気づきました。63:2 舟の人々は、舟に魚と塩漬けがあり、そのにおいだと言いました。しかし彼は、この悪臭は別のものだと言いました。彼がまだ話しているうちに、悪霊に取りつかれた一人の若者が、突然叫び声を上げました。その若者は先に乗り込んで、舟の中に隠れていたのです。63:3 悪霊は、わたしたちの主イエス・キリストの御名によって叱られ、出て行きました。こうして、その人は健やかになりました。そして、だれもが、悪臭は悪霊のものだったと知りました。

64:1 また、身分の高い人々のうちのある人が、悪霊に取りつかれてアントニオスのもとに来ました。その悪霊はひどく恐ろしく、取りつかれた人は、自分がアントニオスのもとへ向かっていることさえ分からないほどでした。そのうえ、自分の体から出るものまで食べていました。64:2 そこで、彼を連れて来た人々は、彼のために祈ってくれるようアントニオスに願いました。アントニオスは若者に同情して祈り、夜通し彼と共に眠らずにいました。明け方ごろ、若者は突然アントニオスに襲いかかり、彼を突き飛ばしました。若者と一緒に来た人々は憤りました。するとアントニオスは言いました。「この若者に腹を立ててはならない。というのも、これをしたのは彼ではなく、彼の中にいる悪霊なのだから。悪霊は、叱られ、水のない所へ追いやられるよう命じられたので、狂い立ってこのようなことをしたのだ。64:3 だから、主をあがめなさい。というのも、彼がこのようにわたしに襲いかかったことが、あなたがたにとって、悪霊が出て行ったしるしとなったからだ」。アントニオスがこう言うと、すぐに若者は健やかになりました。そして、ようやく正気に返り、自分がどこにいるのかが分かりました。そして神に感謝しながら、老人を抱きしめました。

65:1 このほかにも、これに類する多くのことが彼を通して起こったと、ほとんどの修道士たちが語っています。口をそろえ、食い違いなく語っているのです。しかし、これらのことは、ほかのことほどには不思議ではありません。ほかのことのほうが、もっと不思議に見えるのです。65:2 というのも、あるとき彼は食事をしようとして、その前に、午後三時ごろ祈ろうと立ち上がりました。すると、自分が心のうちに引き上げられるのを感じました。しかも思いもよらないことに、立ったまま、自分が自分の外に出たかのようになっているのを見ました。また、ある者たちに空中へと導かれて行くかのような自分も見ました。それから、たちの悪い恐ろしい者たちが空中に立ち、彼を阻んで通らせまいとしているのを見ました。65:3 導く者たちが逆らって戦うと、あの者たちは、彼が自分たちに責めを負う者ではないかと、勘定を求めました。そして、彼の生まれたときからの決算をしようとしました。するとアントニオスを導く者たちは、それを阻んで、あの者たちに言いました。「生まれたときからのことは、主がぬぐい去ってくださった。しかし、修道士となって神に約束したときからのことなら、勘定をしてもよい」。65:4 そこで、あの者たちは訴えはしましたが、罪を明らかにすることはできませんでした。すると、彼の行く道は自由になり、阻むものがなくなりました。そしてすぐ、彼は自分が戻って来て、自分のところに立つかのようなのを見ました。こうして彼は、またすっかりアントニオスに戻ったのです。65:5 そのとき彼は、食べることも忘れて、その日の残りと夜通し、うめきながら祈り続けました。というのも、彼はそれを見て驚いていたからです。わたしたちの戦いは、なんと多くの者を相手にするのか。なんと多くの労苦を経て、空中を通り抜けなければならないのか、と。そして、使徒が『空中の権をもつ君に従って』と言っていたのはこのことだ、と思い起こしました（エペソ二・二）。65:6 というのも、敵が権を振るうのは、まさにこの点、すなわち、戦って、通って行く者たちを阻もうと試みるところだからです。それゆえ使徒は、とりわけこう勧めてい

ました。『悪しき日にあたって、よく抵抗しうるために、神の武具を身につけなさい』（エペソ六・一三）。それは、敵が『わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり』、恥を受けるためです（テトス二・八）。66:7 わたしたちも、このことを学んだのですから、使徒がこう言っているのを思い起こしましょう。『からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである』（第二コリント一二・二）。しかし、パウロは第三の天にまで引き上げられ、『口に言い表わせない言葉』を聞いて下って来ました（第二コリント一二・四）。一方、アントニオスは、自分が空中にまで達し、自由の身と見えるまで戦ったのを見たのです。

66:1 彼には、またこのような賜物もありました。というのも、山にひとりで座り、何かを自分で探し求めても分からないと、祈る彼に、それが摂理によって示されたからです。66:2 そして、書かれているとおり、この幸いな人は神に教えられる者となっていました（ヨハネ六・四五）。現に、その後あるとき、彼は訪ねて来た人々と話し合ったことがありました。魂のありさまについて、またこの後、魂にどんな場所が待っているのかについてです。するとその次の夜、上からだれかが彼を呼んで言いました。「アントニオスよ、立って外に出て、見なさい」。66:3 そこで彼は外に出ました（だれに従うべきかを知っていたからです）。そして見上げると、背の高いだれかが立っているのが見えました。醜く恐ろしい姿で、雲にまで届いていました。また、翼があるかのように上って行く者たちも見えました。背の高い者は両手を伸ばしていました。上って行く者たちのうち、ある者たちは背の高い者に阻まれていました。しかしほかの者たちは、その上を飛び越えて通り抜け、それからは思い煩うことなく引き上げられて行きました。66:4 さて、そのような者たちに対しては、その背の高い者は歯ぎしりしました。しかし落ちて行く者たちのことは喜びました。するとすぐ、アントニオスに声がありました。「見えているものを悟りなさい」。彼は心が開かれて、悟りました。これは魂が通って行く道であり、立っている背の高い者は、信じる者たちをねたむ敵なのだ。敵は、自分に責めを負う者たちを押さえつけて、通らせまいと阻む。しかし、敵に従わなかった者たちは、上を越えて行くので、押さえつけることができないのだ、と。66:5 彼はまたこれを見て、いわば思い起こさせられたかのように、日ごとに、前のものに向かって進もうと、いっそう励みました。彼は、こうしたことを自分から進んで告げたのではありません。祈りに長い時間をかけ、ひとりで驚いていると、一緒にいた人々が尋ね、しつこく迫りました。そこで、父親が子供たちに隠しておけないように、彼も話さずにはいられませんでした。また、彼はこう考えていました。自分の良心は清い。そして彼らにとっては、この話が益になる。修行には良い実があり、幻はしばしば労苦の慰めとなることを学ぶからだ、と。

67〜71章　正しい信仰とアレクサンドリア

67:1 さらに、アントニオスは品性においてよく忍ぶ人で、魂においてへりくだった人でした。というのも、そのような人であったので、教会の規律を並外れて重んじたからです。そして、聖職者ならだれにでも、敬われる順で自分より先に立ってほしいと望みました。67:2 じっさい、監督たちや長老たちに頭を下げることを恥じませんでした。また、執事が益を受けようと彼のもとに来ることがあると、益になることは話しましたが、祈りのことはその執事に譲りました。自分も学ぶ身となることを恥じなかったのです。67:3 じっさい、彼はたびたび尋ね、一緒にいる人々から聞かせてほしいと願いました。そして、だれかが役に立つことを言えば、益を受けたと認めました。さらにまた、彼の顔には大きな、驚くほどの麗しさがありました。67:4 彼はこの賜物も、救い主から受けていました。というのも、こうだったからです。彼が大勢の修道士たちと一緒にいるところへ、前もって彼を知らないだれかが、会いたいと思ってやって来ることがありました。するとその人は、近づくとすぐ、ほかの人々を通り越して彼のもとへ走り寄りました。彼の姿に引き寄せられるかのようでした。67:5 しかし、彼は背の高さや体の幅でほかの人々にまさっていたのではありません。品性の落ち着きと、魂の清さでまさっていたのです。というのも、魂が騒がなかったので、外の感覚も乱れずに保たれていたからです。そのため、魂の喜びから顔も晴れやかで、人々は体の動きから魂のありさまを感じ取り、知ることができました。書かれているとおりです。『心に楽しみがあれば顔色も喜ばしい。心が悲しみのうちにあれば、顔は曇る』（箴言一五・一三）。67:6 このように、ヤコブは、ラバンがはかりごとを思いめぐらしているのを見分けて、妻たちに言いました。『あなたがたの父の顔は、以前のようではない』（創世記三一・五）。このように、サムエルはダビデを見分けました。ダビデは喜びに輝く目と、乳のように白い歯を持っていたからです。67:7 アントニオスも、このように見分けられました。というのも、彼は魂が凪いでいたので決して心を乱されず、心が喜んでいたので決して顔を曇らせなかったからです。

68:1 また、信仰においても、彼はまことに感嘆すべき人で、敬虔でした。というのも、彼は分派の者たちであるメレティオス派と、決して交わりを持たなかったからです。彼らの初めからの悪と離反を知っていたのです。マニ教徒やほかの異端の者たちとも、親しく語り合うことはありませんでした。ただ、敬虔へと立ち返るように諭すときだけは話しました。彼らとの親しい付き合いや語らいは、魂の害と滅びだと考え、人々にもそう説いていたのです。68:2 同じように、彼はアレイオス派の異端も忌み嫌っていました。そして、すべての人に、彼らに近づかず、彼らの悪い信仰を持たないようにと命じていました。現に、あるとき、アレイオスに狂った者たちのうちの何人かが、彼のもとにやって来ました。彼は問いただして、彼らが不敬虔な考えを持っていると知ると、山から追い払いました。彼らの言葉は蛇の毒よりもたちが悪い、と言ったのです。

69:1 また、あるとき、アレイオス派の者たちが、アントニオスも自分たちと同じ考えだと偽りを言いました。すると彼は憤り、彼らに怒りました。そこで、監督たちと兄弟たち皆に頼まれて、山から下りて行きました。そしてアレクサンドリアに入ると、アレイオス派を公に退けました。これは最後の異端であり、反キリストの先駆けだと言ったのです。69:2 また、彼は民にこう教えました。「神の子は造られたものではなく、無から生じたのでもない。父の本質に属する、永遠のことばであり、知恵である。69:3 だから、『存在しなかったときがあった』と言うのは不敬虔なことだ。というのも、ことばは、いつも父と共に存在しておられたからだ。それゆえ、このうえなく不敬虔なアレイオス派とは、どんな交わりも持ってはならない。『光とやみとには、なんの交わりもない』のだから（第二コリント六・一四）。69:4 じっさい、あなたがたは敬虔な考えを持つキリスト者だ。しかし彼らは、父から出た神の子であり、ことばである方を、造られたもの

だと言う。彼らは異邦人と少しも変わらない。創造者である神の代わりに、被造物に仕えているからだ（ローマ一・二五）。69:5 そして、信じなさい。被造物全体さえも、彼らに憤っているのだ。というのも、万物の創造者であり主である方、その方にあって万物が成った方を、彼らは生じたものの中に数え入れているからだ」。

70:1 さて、民は皆、このような人から、キリストに敵対する異端がのろわれるのを聞いて喜びました。町の人々も皆、アントニオスを見ようと駆け集まりました。ギリシャ人たちも、彼らの祭司と呼ばれる者たちまでも、教会堂にやって来て、「神の人にお会いしたいのです」と言いました。だれもが彼をそう呼んでいたからです。70:2 じっさい、そこでも主は、彼を通して多くの人々を悪霊からお清めになり、心を損なわれた人々をおいやしになりました。また、ギリシャ人たちの多くも、せめて老人に触れるだけでもと願いました。益を受けると信じていたのです。70:3 現に、そのわずかな日々のうちに、ふつうなら一年のあいだに見るほど多くの人々が、キリスト者になりました。それから、ある人たちは、群衆のせいで彼が心を乱されていると思いました。そのため、皆を彼から遠ざけようとしました。しかし彼は、心を乱されることなく言いました。「この人たちは、わたしたちが山で戦っている悪霊たちより多くはない」。

71:1 アントニオスが去るとき、わたしたちは彼を見送りました。門のところまで来ると、後ろからある女が叫びました。「お待ちください、神の人よ。娘が悪霊にひどく苦しめられているのです。どうか、お待ちください。走って行くわたしまで、危ない目にあうことのないように」。71:2 老人はこれを聞き、わたしたちにも頼まれて、快くとどまりました。女が近づくと、娘は地面に投げ出されていました。しかし、アントニオスが祈り、キリストの名を唱えると、汚れた悪霊が出て行き、娘は健やかになって起き上がりました。71:3 母親は神をほめたたえ、皆が感謝しました。アントニオス自身も、喜んで去って行きました。自分の家に帰るかのように、山へ帰って行ったのです。

72〜75章　哲学者たちとの問答

72:1 また、アントニオスはたいへん賢い人でした。不思議なのは、文字を習わなかったのに、機転がきき、悟りのある人だったことです。現に、あるとき、ギリシヤ人の哲学者が二人、彼を試みることができると思ってやって来ました。彼は外の山にいました。彼は顔つきからその人たちが何者かを見抜き、出て行って、通訳を介して言いました。「哲学者たちよ、なぜそんなに骨を折って、愚かな人間のところまで来たのか」。彼らが、あなたは愚か者ではなく、たいへん賢い人だと言うと、彼は言いました。「もし愚か者のところに来たのなら、あなたがたの苦労はむだだ。しかし、もしわたしを賢いと思うなら、わたしのようになりなさい。良いものには倣わなければならないからだ。72:2 もしわたしがあなたがたのところへ行ったのなら、わたしがあなたがたに倣っただろう。しかし、あなたがたがわたしのところへ来たのだから、わたしのようになりなさい。わたしはキリスト者だからだ」。彼らは驚きながら去って行きました。というのも、悪霊たちまでがアントニオスを恐れているのを見ていたからです。

73:1 また、別のときに、同じような人々が外の山で彼に会いに来ました。彼が文字を習っていないので、あざけってやろうと思ったのです。アントニオスは彼らに言いました。「あなたがたはどう言うか。知性と文字とでは、どちらが先か。どちらがどちらの原因か。知性が文字の原因か、文字が知性の原因か」。彼らが、知性が先で、文字を考え出したのも知性だと言うと、アントニオスは言いました。「それなら、知性の健やかな人には、文字は必要ない」。73:2 これには、居合わせた人々も、その人たち自身も驚き入りました。そこで彼らは、学問のない人にこれほどの悟りがあるのを見て、驚きながら去って行きました。じっさい、彼は山で育ち、そこで年老いたのに、そのような人にありがちな粗野な品性を持ってはいませんでした。かえって、愛想がよく、洗練された人でした。73:3 彼の言葉は、神の塩で味つけられていました。そのため、だれも彼をねたまず、むしろ彼のもとに来る人は皆、彼のことを喜んだのです。

74:1 現に、その後また、別の何人かがやって来ました。この人たちは、ギリシヤ人のあいだで知者とされている人々でした。彼らは、キリストにあるわたしたちの信仰について、彼に説明を求めました。そして、神の十字架の宣べ伝えについて理屈で論じようとし、あざけろうとしました。アントニオスは少し間を置き、まず彼らの無知をあわれみました。それから、彼の言葉をよく訳す通訳を介して、こう言いました。「どちらが立派か。十字架を告白することか。それとも、あなたがたのあいだで神々と呼ばれているものに、姦淫や少年を汚すことを負わせることか。というのも、わたしたちの言うことは、勇気のしるしであり、死を軽んじる心を見分けるしるしだからだ。しかし、あなたがたの言うことは、放縦の情欲の話だ。74:2 次に、どちらがよいか。こう言うことか。神のことばはお変わりにならなかった。かえって、同じ方のままで、人々の救いと恵みのために人間の体をおとりになった。人間の生まれにあずかって、人々を神の、知性ある本性にあずからせてくださるためだ、と。それとも、神なるものを理性のない生き物に似せ、そのために四つ足の獣や這うもの、人間の像を拝むことか。じっさい、これらが、知者であるあなたがたの拝むものなのだ。74:3 あなたがたは、キリストが人としてお現れになったと言うわたしたちを、どうしてあざけることができるのか。あなたがたこそ、魂を天から[1]切り離し、魂は迷い出て、天の丸天井から体の中へ落ちたと唱えているではないか。それも、せめて人間の体にだけならまだよい。それなのに、四つ足の獣や這うものにまで移り、落ちていくと言うのだ。74:4 というのも、わたしたちの信仰は、人々の救いのためにキリストがおいでになったと語るからだ。しかし、あなたがたが迷っているのは、生じたのでない魂について説くからだ。わたしたちは、摂理の力と人間への愛を思う。このことさえ、神にはできないことではなかったのだ、と。しかし、あなたがたは、魂を知性の像と言いながら、魂に落下を負わせ、魂は変わるものだと作り話をする。そうして結局、魂のせいで、知性そのものまで変わるものにしてしまう

のだ。74:5 じっさい、像のもとであるものは、必ず像と同じようなものでなければならない。知性についてそのように考えるなら、思いめぐらしてみなさい。あなたがたは、知性の父そのものにまで冒瀆の言葉を向けているのだ」。

75:1 「十字架について、あなたがたは、どちらがよいと言うだろうか。悪い者たちがはかりごとを仕掛けてきたとき、十字架を耐え忍び、どのような形で迫ってくる死にもすくまないことか。それとも、作り話を語ることか。オシリスとイシスのさまよい、テュフォンのはかりごと、クロノスの逃亡、子供を飲み込んだこと、父殺しの話だ。じっさい、これらが、あなたがたの知恵なのだ。75:2 十字架をあざけるのに、どうして復活には感嘆しないのか。というのも、十字架のことを語った人たちが、復活のことも書いたからだ。それとも、十字架のことを持ち出しながら、なぜ死人がよみがえらされたことは黙っているのか。目の見えない人が見えるようになったことも、中風の人がいやされたことも、黙っているのか。重い皮膚病の人が清められたことも、海の上をお歩きになったことも、そのほかのしるしと不思議も、黙っているのか。これらは、キリストがもはや人ではなく、神であることを示している。あなたがたは、自分自身をひどく損なっていて、わたしたちの聖書を誠実に読んだことがないように、わたしには思える。75:3 しかし、あなたがたこそ読んでみなさい。そして見なさい。キリストのなさったことは、この方が神であり、人々の救いのためにこの世においでになったことを示している」。

訳注

1 多くの写本は『天から』を『知性から』と読む。

76〜80章　信仰の働きと十字架の力

76:1「では、あなたがたも、自分たちの宗教のことをわたしたちに話してみなさい。理性のない生き物について、理性のなさと野蛮さのほかに、何が言えるだろうか。聞くところでは、あなたがたは、これらは自分たちのあいだで作り話として語られているのだ、と言いたがる。そして、寓意で解く。コレがさらわれたことは大地のこと、ヘファイストスの足が不自由なことは火のことだと言う。ヘラは空気、アポロンは太陽、アルテミスは月、ポセイドンは海だと言う。しかし、たとえそうでも、あなたがたが神ご自身を拝んでいないことに変わりはない。かえって、すべてのものを造られた神をさしおいて、被造物に仕えているのだ。76:2というのも、もし被造物が美しいからこのような話をこしらえたのなら、あなたがたは感嘆するところまでで止まるべきだった。造られたものを神にしてはならなかった。造り主の誉れを、生じたものに与えないためだ。76:3さもなければ、建築家の誉れを、その人が建てた家に移し、将軍の誉れを兵士に移す時だ、ということになる。では、これに対して何と言うのか。十字架に何かあざけりに値するところがあるかどうか、わたしたちに分かるように言ってみなさい」。

77:1彼らが答えに窮し、あちこちと身をよじっていると、アントニオスはほほえんで、また通訳を介して言いました。「これらのことは、見ただけでも誤りが明らかだ。しかし、あなたがたはむしろ論証の言葉によりかかっている。そしてその技術を持っているので、わたしたちにも、言葉による論証なしには神を敬わないように、と望んでいる。それなら、まずあなたがたが言いなさい。物事は、とりわけ神についての知識は、どのようにして確かに見分けられるのか。言葉の論証によってか。それとも、信仰の働きによってか。また、どちらが先にあるのか。働きによる信仰か。それとも、言葉による論証か」。彼らが、働きによる信仰が先にあり、これこそが確かな知識だと答えると、アントニオスは言いました。「よく言った。というのも、信仰は魂のありようから生じるが、弁証術は、それを編み出した人々の技術から出るものだからだ。77:2だから、信仰による働きがある人々には、言葉による論証は必要ない。おそらく余計でさえある。じっさい、わたしたちが信仰によって理解していることを、あなたがたは言葉で組み立てようとする。しかも、あなたがたは、わたしたちの理解していることを言い表すことさえできないことがよくある。だから、信仰による働きのほうが、あなたがたの詭弁の推論よりもすぐれていて、堅固なのだ」。

78:1「そういうわけで、わたしたちキリスト者は、ギリシャの言葉の知恵によって奥義を持っているのではない（第一コリント一・一七）。かえって、イエス・キリストを通して神から豊かに与えられる信仰の力によって持っているのだ。このことが真実である証拠に、見なさい。いま、わたしたちは文字を習っていないのに、神を信じている。神の造られたものを通して、すべてに及ぶ神の摂理を認めているのだ。78:2また、わたしたちの信仰が働いている証拠に、見なさい。いま、わたしたちはキリストへの信仰によりかかっている。しかし、あなたがたは詭弁の言葉の争いによりかかっている。また、あなたがたのもとにある偶像の幻影は無力にされていくが、わたしたちのもとにある信仰は至る所に広がっていく。78:3あなたがたは推論し、詭弁を弄しても、人々を説き伏せて、キリスト教からギリシャ人の宗教へ移らせることはできない。しかし、わたしたちはキリストへの信仰を教えて、あなたがたの迷信をはぎ取っている。そして皆が、キリストは神であり、神の子であると認めている。78:4あなたがたは美しい言葉を並べても、キリストの教えを妨げることはできない。しかし、わたしたちは、十字架につけられたキリストの名を唱える。そして、あなたがたが神々として恐れている悪霊を、すべて追い出している。78:5十字架のしるしがなされる所では、魔術は力を失い、まじないは働かない」。

79:1「では、言ってみなさい。あなたがたの神託は、いまどこにあるのか。エジプト人の呪文はどこにあるのか。魔術師たちのまぼろしはどこにあるのか。こ

れらはすべて、いつやみ、いつ力を失ったのか。キリストの十字架があったときではないか。それなら、あざけりに値するのは、この十字架だろうか。それともむしろ、十字架によって無力にされ、弱さを暴かれたもののほうだろうか。じっさい、これも不思議なことだ。あなたがたの宗教は、一度も迫害されたことがない。それどころか、町ごとに人々からあがめられている。しかし、キリストに属する人々は迫害されている。それなのに、わたしたちの宗教のほうが、あなたがたの宗教よりも栄え、増えている。79:2 あなたがたの宗教は、たたえられ、名高いのに、滅びていく。しかし、キリストの信仰と教えは、あなたがたにあざけられ、たびたび皇帝たちに迫害されたのに、全世界に満ちた。79:3 じっさい、神を知ることが、いつこれほど輝いたことがあっただろうか。慎みと純潔の徳が、いつこれほど現れたことがあっただろうか。死が、いつこれほど軽んじられたことがあっただろうか。キリストの十字架があったときではないか。殉教者たちは、キリストのゆえに死を軽んじている。教会のおとめたちは、キリストのゆえに体を清く汚れのないものに保っている。これを見るなら、だれもこのことを疑わない」。

80:1 「これらのしるしは、キリストへの信仰だけが、神を敬ううえで真実のものだと示すのに十分だ。それでも見てのとおり、あなたがたはまだ信じずに、言葉から出る推論を求めている。80:2 わたしたちの師が言ったとおり、わたしたちは『巧みなギリシャの知恵の言葉』（第一コリント二・四）によって論証するのではない。そうではなく、言葉から出る組み立てにはっきりと先立つ信仰によって、人を説き伏せるのだ。80:3 見なさい。ここに、悪霊に苦しめられている人たちがいる」。そこには、悪霊に悩まされて、彼のところに来ていた人が何人かいたのです。アントニオスはその人たちを真ん中に連れ出して、言いました。「あなたがたの推論を使いなさい。どんな技術でも魔術でも、好きなものを使いなさい。そして自分たちの偶像を呼び求めて、この人たちを清めなさい。それができないなら、わたしたちとの争いをやめなさい。そうすれば、キリストの十字架の力を見るだろう」。80:4 そう言うと、アントニオスはキリストを呼び求め、苦しんでいる人たちに、十字架のしるしで二度三度、印をしました。すると、その人たちはすぐに、すっかり元どおりになって立ち上がりました。正気になって、それからは主に感謝していました。80:5 哲学者と呼ばれる人々は驚き、この人の悟りと、起こったしるしに、心から舌を巻きました。しかし、アントニオスは言いました。「なぜ、このことに驚くのか。これを行っているのはわたしたちではない。キリストが、ご自分を信じる人々を通して、これを行っておられるのだ。80:6 だから、あなたがたも信じなさい。そうすれば、わたしたちのもとにあるのは言葉の技術ではなく、キリストへの愛によって働く信仰だ、と分かるだろう。その信仰を持つなら、あなたがたも、もはや言葉による論証を求めないだろう。キリストへの信仰だけで十分だと考えるようになるだろう」。80:7 以上が、アントニオスの言葉です。彼らはこのことにも驚き、アントニオスを抱いてあいさつしました。そして、彼から益を受けたと言い表しながら、去って行きました。

81〜84章　皇帝たちの手紙とらばの幻

81:1 アントニオスの評判は、皇帝たちにまで届きました。じっさい、皇帝コンスタンティヌスと、その子で同じく皇帝のコンスタンティウスとコンスタンスは、これらのことを知りました。そして、父に宛てるようにして彼に手紙を書き、彼から返事をもらいたいと願ったのです。81:2 しかし、彼はその手紙を大したものとは考えず、手紙をもらって喜ぶこともありませんでした。皇帝たちが手紙を書いてくる前と、少しも変わらなかったのです。81:3 手紙が届けられると、彼は修道士たちを呼んで言いました。「皇帝がわたしたちに手紙を書いてきても、驚いてはならない。皇帝も人間だからだ。むしろ、神が人々のために律法をお書きになり、ご自分の御子によってわたしたちにお語りになったことに驚きなさい（ヘブル一・二）」。81:4 さて、彼は手紙を受け取りたくありませんでした。このようなものに返事を書くすべを知らない、と言っていたのです。しかし、修道士たちが勧めました。皇帝たちはキリスト者であるし、また、退けられたと思ってつまずくことがないように、というのです。それで、彼は手紙を読み上げることを許しました。81:5 そして、返事を書きました。皇帝たちがキリストを礼拝していることをほめたうえで、救いにかかわることを勧めたのです。いまあるものを大きなものと考えず、むしろ来るべきさばきを思い起こすように。そして、キリストだけがまことの、永遠の王であることを知るように、と。81:6 また、人々をいつくしみ、正義と貧しい人々に心を配るように、と求めました。皇帝たちもその返事を受け取って喜びました。このように、彼はすべての人に慕われていました。だれもが、彼を父としていただきたいと願っていたのです。

82:1 このように知られ、訪ねて来る人々にこのように答えていた彼は、また内の山に帰りました。そして、いつもの修行を続けました。訪ねて来た人々と一緒に座っているときや歩いているときに、言葉を失って黙り込んでしまうことがよくありました。ダニエル書に書いてあるとおりです（ダニエル四・一九）。82:2 しばらくたつと、彼は一緒にいる兄弟たちに話の続きを語りました。一緒にいた人々は、彼が何かの幻を見ているのだと気づきました。じっさい、彼は山にいながら、エジプトで起こっていることをたびたび見て、監督サラピオンに話したこともありました。サラピオンはそのとき中に居合わせて、アントニオスが幻に心を奪われているのを見ていたのです。82:3 現に、あるとき彼は、座って仕事をしていると、我を忘れたようになりました。そして幻を見ながら、しきりにうめいていました。しばらくすると、一緒にいた人々のほうを向いてうめき、震えながら祈りました。ひざをかがめて、長いあいだそのままでいました。82:4 それから、老人は立ち上がって泣きました。そこで、一緒にいた人々は震えおののき、たいへん恐れて、何があったのかを聞かせてほしいと願いました。そして、しつこくせがみ、とうとう彼は迫られて話すことになりました。彼はなおも深くうめいて言いました。「子供たちよ、幻で見たことが起こる前に、死んだほうがましだ」。82:5 彼らがまた頼むと、彼は涙を流して言いました。「怒りが教会を襲おうとしている。教会は、理性のない家畜のような人々に引き渡されようとしている。というのも、わたしは教会堂の聖卓を見たのだ。そのまわりを、らばが四方から取り囲んで立ち、中にあるもの[1]を蹴っていた。家畜が見境なく跳ね回って蹴るような蹴り方だった。82:6 あなたがたも、わたしがどんなにうめいていたか、きっと気づいただろう」と彼は言いました。「じっさい、わたしは声がこう言うのを聞いたのだ。『わたしの祭壇は忌まわしいものとなる』」。老人が見たのは、このようなことでした。そして二年後に、このたびのアレイオス派の襲撃と、教会堂の略奪が起こりました。そのとき彼らは、器を力ずくで奪って、異邦人に運ばせました。また、異邦人を仕事場から駆り出して、自分たちの集まりに加わらせました。そして、異邦人のいる前で、聖卓の上で好き勝手なことをしたのです。82:7 そのとき、わたしたちはみな悟りました。らばの蹴りは、いまアレイオス派が家畜のように理性もなく行っていることを、アントニオスに前もって示していたのです。さて、アントニオスは、この幻を見たとき、一緒にいた人々

を励まして言いました。「子供たちよ、気を落としてはならない。主はお怒りになったように、また、いやしてくださるからだ。82:8 教会は、またすぐに自分の飾りを取り戻し、いつものように輝くだろう。あなたがたは、追われた人々が元の所に戻されるのを見るだろう。不敬虔がまた自分の巣穴に引き下がり、敬虔な信仰がどこででも、まったく自由に、はばかることなく語るのを見るだろう。ただ、アレイオス派と一緒になって自分を汚してはならない。82:9 じっさい、あの教えは使徒たちのものではない。悪霊たちと、その父である悪魔のものだ。むしろ、それは実を結ばず、理性がなく、正しくない心から出たものだ。らばに理性がないのと同じだ」。

83:1 アントニオスのことは、以上のようなものです。人を通してこれほど多くの不思議が起こったからといって、わたしたちは疑ってはなりません。というのも、これは救い主の約束だからです。救い主はこうお語りになりました。『もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって「ここから移れ」と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう』（マタイ一七・二〇）。83:2 また、こうもお語りになりました。『よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたがわたしの名によって父に何かを求めるなら、父はくださるであろう。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう』（ヨハネ一六・二三〜二四）。弟子たちと、ご自分を信じるすべての人々に、こうお語りになったのも、この方です。『病人をいやし、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい』（マタイ一〇・八）。

84:1 現に、アントニオスは命令していやしたのではありません。祈り、キリストの名を唱えていやしたのです。それで、いやしているのは彼自身ではなく、主であることが、すべての人に明らかになりました。主がアントニオスを通して人間への愛を示し、苦しんでいる人々をいやしておられたのです。84:2 アントニオスのものは、祈りと修行だけでした。その修行のために山にとどまっていた彼は、神のことがらを観想することを喜んでいました。しかし、多くの人に煩わされ、外の山へ引き出されることを悲しんでいました。84:3 というのも、裁判官たちもみな、彼に山から下りて来てほしいと願っていたからです。裁判を受ける人々がついて来てしまうので、自分たちがそこへ入って行くことはできなかったのです。それでも、彼らは、彼に来てもらって、ただ一目会いたいと願いました。彼のほうは、そうした人々のもとへ出かけることを避け、断っていました。しかし、裁判官たちはあきらめず、かえって罪に問われている人々を、兵士に付き添わせて送ってよこしました。せめてその人々のためにでも、彼が下りて来るようにするためでした。84:4 そこで、彼はやむをえず、またその人々が嘆くのを見て、外の山へ出て来ました。しかし、彼の骨折りは、ここでもむだではありませんでした。というのも、彼が来たことは、多くの人の益となり、恵みとなったからです。84:5 また、彼は裁判官たちにも益を与えました。何よりも正義を重んじ、神を恐れるようにと勧めたのです。そして、自分がさばくそのさばきで、自分もさばかれることを知るように、と勧めました（マタイ七・二）。それでも、彼は何よりも、山で過ごすことを愛していました。

訳注

1 写本はみな『中にいる人々を』と読む。

85〜88章　将軍たちとエジプトの医者

85:1 あるとき、アントニオスは、彼を必要とする人々からこのように強く迫られました。将軍も、山を下りて来てほしいと何度も願いました。そこで彼は出て行き、救いにかかわることと、助けを求める人々のことを少し語ると、帰りを急ぎました。85:2 ドゥクスと呼ばれるその将軍は、もっとゆっくりしていくようにと願いました。しかしアントニオスは、彼らのもとに長くとどまることはできない、と言いました。そして、気のきいたたとえで将軍を納得させました。「魚は、乾いた陸に長くいると死んでしまう。それと同じように、修道士も、あなたがたのところにぐずぐずとどまり、あなたがたの間で長く過ごすと、弱ってしまう。85:3 だから、魚が海へ急ぐように、わたしたちも山へ急がなければならない。ぐずぐずしているうちに、内にあるものを忘れてしまわないためだ」。将軍は、彼からこのことや、ほかの多くのことを聞いて驚き、こう言いました。「この人はまことに神のしもべだ。というのも、神に愛されているのでなければ、学問のない人に、このような、これほどの知性がどこから来るだろうか」

86:1 また、バラキオスという名の将軍がいました。彼は、忌まわしい名のアレイオス派のための熱意から、わたしたちキリスト者を激しく迫害していました。彼はひどく残忍で、おとめたちまで打ちたたき、修道の生活を送る人々を裸にしてむち打つほどでした。そこで、アントニオスは彼に使いを送り、こういう趣旨の手紙を書きました。「怒りがあなたに臨もうとしているのが、わたしには見える。だから、キリスト者を迫害するのをやめなさい。怒りがあなたを捕らえることのないように。じっさい、怒りはもう、あなたに臨もうとしているのだ」86:2 しかしバラキオスは、笑って手紙を地面に投げ捨て、それにつばを吐きかけました。そして、手紙を届けた人々を辱め、アントニオスにこう伝えるよう命じました。「おまえは修道士たちのことを気にかけているのだから、すぐにおまえのところにも行ってやる」86:3 ところが、五日もたたないうちに、怒りが彼を捕らえました。というのも、バラキオス自身とエジプトの長官ネストリオスが、ある宿駅へ出かけたからです。それはカイレウと呼ばれる、アレクサンドリアから最初の宿駅でした。二人とも馬に乗っていました。その馬はどちらもバラキオスの持ち馬で、彼が飼っている馬の中でも、とりわけおとなしい馬でした。86:4 ところが、まだその場所に着かないうちに、馬たちは、よくするように、互いにじゃれ合い始めました。すると突然、ネストリオスの乗っていた、おとなしいほうの馬が、バラキオスにかみついて引き倒し、彼に襲いかかりました。そして、その歯で彼の腿をひどく食い裂いたので、彼はすぐに町へ運ばれましたが、三日のうちに死にました。人々はみな、アントニオスが前もって告げたことが、たちまち成就したことに驚きました。

87:1 このように、アントニオスは、つらく当たる人々には警告を与えました。一方、彼に会いに来るほかの人々を諭しました。すると、彼らはその場で裁くことも忘れ、この世の生活から退いた人々を幸いな者とたたえるほどでした。87:2 また、彼は不当な扱いを受けている人々を、まるで苦しんでいるのが他人ではなく自分自身であるかのように、かばいました。さらに、彼はすべての人の益となる大きな力を持っていました。それで、兵役についている多くの人々や、多くの財産を持つ人々が、生活の重荷を下ろして、その後は修道士になりました。87:3 要するに、彼は神からエジプトに与えられた医者のようでした。というのも、悲しんで彼に会いに来て、喜んで帰らなかった人がいたでしょうか。亡くなった身内を嘆いてやって来て、すぐに悲しみを捨てなかった人がいたでしょうか。怒ってやって来て、親しい付き合いをする者に変わらなかった人がいたでしょうか。気落ちした貧しい人が彼に会いに来て、彼の話を聞き、彼を見て、富を見下し、貧しさの中で慰めを得なかったでしょうか。なげやりになった修道士が彼のもとに来て、前よりも強くならなかったでしょうか。若者が山に来てアントニオスを見て、すぐに快楽を捨て、慎みを愛するようにならなかったでしょうか。悪霊に

試みられて彼のもとに来て、安らぎを得なかった人がいたでしょうか。思いに悩まされてやって来て、心が凪がなかった人がいたでしょうか。

88:1 というのも、アントニオスの修行には、こういうすばらしいところもあったからです。先にも言ったように、彼は霊を見分ける賜物を持っていたので、霊たちの動きを見分けました。そして、彼らのそれぞれが何に熱心で、何をしようと向かっているのかを、知らずにいることはありませんでした。88:2 彼自身が霊たちにもてあそばれなかっただけではありません。思いに悩まされている人々を励まし、どうすれば悪霊たちのはかりごとをくつがえせるのかを教えました。人に働きかけている者たちの弱さと悪だくみを、話して聞かせたのです。88:3 現に、だれもが、彼に油を塗られたかのように山を下りて行き、悪魔とその手下の悪霊たちの策略をものともしませんでした。また、婚約者のいたおとめたちのうち、どれほど多くが、キリストのおとめとしてとどまったことでしょう。遠くからアントニオスを見ただけで、そうしたのです。よその地方からも、人々が彼のもとへやって来ました。88:4 その人々も、ほかのすべての人と同じく益を受けて、父に見送られる子のように帰って行きました。現に、彼が眠りについた後、人々はみな父を失った孤児のようになって、ただ彼の思い出によって自分たちを慰めています。同時に、彼の諭しと勧めとを心に保っています。

89〜94章　最後の教えと死、結び

89:1 彼の生涯の終わりがどのようなものだったかも、わたしが思い起こして語るに値することです。聞きたいと願っているあなたがたが聞くにも値します。というのも、それもまた、見習うべきものだったからです。彼はいつものように、外の山にいる修道士たちを訪ねました。そして、摂理から自分の死について知らされると、兄弟たちに語りかけて言いました。「わたしがあなたがたを訪ねるのは、これが最後になる。この世で互いにまた顔を合わせることがあれば、わたしは驚くだろう。89:2 わたしも、もう世を去る時だ。百五歳に近いのだから」。これを聞いた人々は泣き、老人を抱きしめて口づけしました。しかし彼は、よその町から自分の町へ旅立つ人のように、喜んで語り合いました。そして、彼らにこう命じました。「労苦をおろそかにしてはならない。修行においてうみ疲れてはならない。日々死ぬ者として生きなさい。先にも言ったように、魂を汚れた思いから守るよう努めなさい。聖徒たちにならう熱意を持ちなさい。しかし、分派の者たちであるメレティオス派に近づいてはならない。あなたがたは、彼らの悪く俗悪な心根を知っているのだから。アレイオス派とも、どんな交わりも持ってはならない。じっさい、彼らの不敬虔もまた、だれの目にも明らかだ。89:3 たとえ裁判官たちが彼らをかばっているのを見ても、心を乱されてはならない。彼らの見せかけの権勢はやむからだ。それは死ぬべきもので、つかの間のものにすぎない。だから、むしろ彼らから自分を清く守りなさい。父祖たちの伝えを守りなさい。なによりも、わたしたちの主イエス・キリストへの敬虔な信仰を守りなさい。あなたがたはそれを聖書から学び、わたしからもたびたび思い起こさせられてきた」

90:1 兄弟たちは、自分たちのところにとどまって、そこで生涯を終えてほしいと、彼に強く求めました。しかし、彼は承知しませんでした。それには多くの理由があり、彼は口に出さなくてもそれを示していました。しかし、とりわけ次の理由からでした。エジプト人は、亡くなった熱心な人々の遺体、とくに聖なる殉教者たちの遺体を、弔って亜麻布で包むのを常とします。しかし、地の下には隠さず、寝台の上に置いて、自分たちの家の中に保っておくのです。そうすることで、亡くなった人々を敬っていると考えているのです。90:2 アントニオスは、このことについて、民に命じてくれるよう、監督たちにもたびたび頼みました。同じように、信徒たちをたしなめ、女たちを叱りました。そして、こう言いました。「それは定めにかなうことでもなく、少しも敬虔なことでもない。90:3 じっさい、族長たちや預言者たちの遺体は、今に至るまで墓に保たれている。主のお体さえも墓に納められ、上に置かれた石がそれを隠した。三日目におよみがえりになるまでだ（ヨハネ一九・四一、マタイ二七・六〇）」。90:4 こう言って、彼は示しました。亡くなった人の遺体を死後に隠さない者は、たとえその遺体が聖なるものであっても、定めに背いているのだ、と。というのも、主のお体より大きなもの、聖なるものが何かあるでしょうか。そこで、多くの人がこれを聞いて、それからは遺体を地の下に隠すようになりました。そして、よく教えられたことを主に感謝しました。

91:1 しかし彼自身は、これを知っていたので、彼らが自分の体もそのように扱うのではないかと恐れました。そこで、外の山の修道士たちに別れを告げると、急いで去りました。そして、いつも住んでいた内の山に入り、数か月後に病気になりました。彼は一緒にいた者たちを呼び寄せました。それは二人で、十五年のあいだ内にとどまって修行し、老いた彼に仕えていた人々でした。彼は二人に言いました。「わたしは、書いてあるとおり、先祖たちの道を行く（ヨシュア二三・一四）。主がわたしを呼んでおられるのが見えるからだ。しかし、あなたがたは身を慎み、長年の修行をむだにしてはならない。いま始めたばかりのように、自分の意欲を保つよう努めなさい。91:2 あなたがたは、はかりごとをめぐらす悪霊たちを知っている。彼らが荒々しくても、力は弱いことを知っている。だから、彼らを恐れてはならない。むしろ、いつもキリストを呼吸し、キリストを

信じなさい。日々死ぬ者として生き、自分に気をつけ、わたしから聞いた勧めを思い起こしなさい。91:3 分派の者たちとは、どんな交わりもあってはならない。異端の者たちであるアレイオス派とも、決して交わってはならない。あなたがたも知っているとおり、わたしもまた彼らを避けてきたからだ。キリストに逆らい、正しい教えから外れた彼らの異端のゆえにだ。91:4 むしろ、あなたがたも、いつも自分を結びつけるよう努めなさい。まず主に、それから聖徒たちに。死んだ後、彼らもまた、あなたがたを友として、親しい者として、永遠のすまいに迎えてくれるためだ。91:5 これらのことを考え、これらのことに思いを向けなさい。あなたがたがわたしのことを気にかけ、父のように思い起こしてくれるなら、こうしなさい。だれにもわたしの体をエジプトへ運ばせてはならない。彼らが家の中に安置することのないためだ。じっさい、わたしが山に入り、ここへ来たのは、そのためなのだ。91:6 あなたがたも知っているとおり、わたしは、こうする人々をいつもたしなめ、そのような習わしをやめるよう命じてきた。だから、わたしの体はあなたがたが弔い、地の下に隠しなさい。わたしの言葉をあなたがたのもとで守り、あなたがたのほかはだれにもその場所を知られないようにしなさい。91:7 じっさい、わたしは死者の復活のときに、救い主から、それを朽ちないものとして取り戻すのだ。わたしの衣は分けなさい。監督アタナシオスには、羊の毛皮の一枚と、わたしが下に敷いていた外衣とを与えなさい。それは彼が新しいものとしてわたしにくれたが、わたしのもとで古びてしまった。監督サラピオンには、もう一枚の羊の毛皮を与えなさい。あなたがたは、毛の衣を取っておきなさい。91:8 では、子供たちよ、無事でいなさい。アントニオスは移って行き、もうあなたがたと共にはいないのだから」

92:1 こう言い終えると、二人は彼に口づけしました。すると彼は足を引き上げました。そして、自分のもとに来た者たちを友として見るかのように、その者たちのゆえに大いに喜びました。というのも、横たわったまま、晴れやかな顔をしているのが見えたからです。こうして、彼は息絶えて、先祖たちのもとに加えられました。92:2 二人は、彼が命じておいたとおりに、彼の体を弔い、布で包んで、地の下に隠しました。それがどこに隠されているのか、今に至るまで、この二人のほかはだれも知りません。92:3 幸いなアントニオスの羊の毛皮と、彼が使い古した外衣を受け取った人々は、それぞれ、それを大きな宝のように大切にしています。じっさい、それを見ると、アントニオスを見ているかのようです。それを身にまとうと、彼の論しを喜んで身に帯びているかのようなのです。

93:1 これが、アントニオスの体をもっての生涯の終わりです。先に語ったのが、その修行の初めでした。これらは彼の徳に比べればわずかなことですが、あなたがたも、ここから考えてください。神の人アントニオスが、どのような人であったかを。彼は若いころから、これほどの年になるまで、修行への意欲を変わらずに保ちました。年老いたからといって、ぜいたくな食べ物に負けることもありませんでした。体が弱ったからといって、衣の形を変えることも、足を水で洗うことさえもありませんでした。それでも、どこも損なわれずにいたのです。93:2 じっさい、彼の目は損なわれず、まったく健やかで、よく見えました。歯も一本も抜け落ちていませんでした。ただ、老人の高齢のために、歯ぐきのところですり減っていただけでした。93:3 手も足も健やかなままでした。さまざまな食べ物や湯浴みや、とりどりの衣服を用いる人々がいます。総じて、そのだれよりも、彼のほうが晴れやかで、力の上でも意欲に満ちて見えました。93:4 彼がいたるところで評判になり、すべての人から感嘆され、彼を見たことのない人々からも慕われていること。これは、彼の徳と、神に愛された彼の魂とを見分けるしるしです。93:5 じっさい、アントニオスが知られるようになったのは、著作や教会の外の知恵、何かの技によってではありません。ただ神を敬うことによってなのです。これが神からの贈り物であることを、だれも否定しないでしょう。93:6 じっさい、彼は山に隠れ住んでいました。その彼のことが、どうしてヒスパニアやガリアにまで、ローマやアフリカにまで聞こえたのでしょうか。ご自分の人々をいたるところで知られるようにしてくださる神が、そうなさったのでなければ。神は、初めにアントニオスにも、そのことを約束なさったのです。じっさい、彼らは隠れて行い、人に知られずにいようと望むかもしれません。それでも主は、彼らをともしびのように、すべての人にお示しになります。それは、話を聞く人々が、こうして戒めは守り通せるものだと知り、徳への道を求める熱意を受けるためです。

94:1 ですから、このことを、ほかの兄弟たちに朗読してください。修道士の生き方がどのようなものでなければならないかを、彼らが学ぶためです。また、彼らが次のことを確信するためです。わたしたちの主であり救い主であるイエス・キリストは、ご自分を尊ぶ者を尊んでくださいます。最後までご自分に仕える者を、天の御国に導いてくださるだけではありません。この世で、彼らは身を隠し、世を退こうと努めます。それでも主は、その人々をいたるところで明らかにし、名の知られた者にしてくださいます。それは、その人々の徳と、ほかの人々の益とのゆえです。94:2 必要があれば、異邦人にも朗読してください。せめてこうしてでも、彼らが次のことを認めるためです。わたしたちの主イエス・キリストが神であり神の子であることだけではありません。キリストにまことにお仕えし、敬虔にキリストを信じる人々がいます。すなわちキリスト者たちです。ギリシャ人自身は悪霊たちを神々だと思っていますが、キリスト者たちは、悪霊たちが神々でないことを明らかにします。それだけでなく、人々を惑わし滅ぼす者として、踏みつけ、追い払うのです。わたしたちの主キリスト・イエスにあって、そうするのです。このお方に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

アントニオス伝

2026年11月23日版
著者　アレクサンドリアのアタナシオス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/athanasius-life-of-antony/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/athanasius-life-of-antony
全文を、ギリシア語原文（Βιός Ἀντωνιόυ）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。